
D.C.Q.S.II～ダカーポクエスト 2～

FUSE

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

D・C・Q・S・II ～ダカーポクエスト2～

【Nコード】

N8415C

【作者名】

FUSE

【あらすじ】

いつもどおりかったるい学園生活を送っていた純一にまたあのゲームソフトが現れる。そしてまたゲームの世界に行くことになった純一は無事にもとの世界に戻ることができるのか？（注…これはD・C・Q・S・ⅠダカーポクエストⅠの続編です。読む前に初代ダカーポクエストを読むことをオススメします。）

プロローグ（前書き）

これはD・C・Q・S・（ダカーポクエスト）の続編です。読む前に初代ダカーポクエストを読むことをオススメします。

純一..これあらすじにも書いてなかったか？

作者..念には念をとってことだよ

プロローグ

「かったりい」

「朝倉はそればっかだなあ」

純一が机にうつ伏せになり、ダラダラしてる所、工藤が来た。

一旦工藤はゲームの世界で、みんなに女とバレているが、夢ということでごまかしが通っている。

ついでに純一も工藤が女だと、バラすつもりはない。

「そういえば、杉並はどうした？いつも俺らにちょっかい出してくるのに」

純一はだらけきった格好で言い、杉並の机に目をやった。

「何か考え事してるみたいだな」

工藤が言った。

「杉並が考え事か・・・珍しいな」

純一はそう言って立ち上がり、工藤と杉並の所まで移動した。

「悩み事か？」

純一が杉並に話し掛けた。

「ん？朝倉か？」

杉並の机の上には同じ特別号の『ヌー』がいくつも広げられていた。

「どうしたんだよ？同じのばかり」

工藤が全ての『ヌー』をパラパラとめくりながら言った。

「問題は本ではない！これだ」

杉並はそう言って、1枚のディスクを取り出した。

純一はそのディスクに見覚えがあった。

何のタイトルもかかれていないハードディスク。

「『ヌー』の特別付録についていたのだが、全然起動しなくて、動かんらしい」

杉並はそう言い、今度は『世界の怪奇現象』と書かれたディスクを3枚出した。

「他の『ヌー』にはこのディスクがついていたんだが、この『ヌー』だけが何も書かれていないのだ」

杉並はそう言い、再び『ヌー』の説明書の欄を読み出した。

「なあ、このディスクちょっと借りていいか？」

純一は何も書かれていないディスクを手に取り、杉並に言った。

「別に構わないが、必ず返せよ。借り物なのだから」

「わかってるって」

純一はそう言い、自分の席に着いた。

「これはさくらに相談したほうがいいな」

純一はそう呟き、放課後までまた仮眠を取るため、机にうつ伏せた。

放課後

純一はさくらを屋上に呼び、誰もいないことを確認してからディスクをさくらに見せた。

「うにゃ！これって・・・！どうしてお兄ちゃんが持ってるの？」

さくらが驚いた顔で言った。

「『ヌー』の付録に紛れてたみたいだ。因みに他の『ヌー』にはちやんとしたのが入ってたらしい」

純一は休み時間のことを、さくらに話した。

「確かにこれは、あのゲームソフトだよ。起動したらゲームの世界に吸い込まれる、特異ソフト」

さくらが真面目な顔で言った。

「なんでそれがここにあるんだよ！」

「今度はこのソフトがボク達を呼んでるみたい」

さくらはそう言いながら、純一の手を引っ張った。

「ちょー！どこ行くんだよ」

「これが1回目なら破壊行為にでるけど、ボク達はもうこのゲームとは無関係じゃない。ほっとくと大変なことになるよ」

純一の手を引っ張り、さくらは学校の中に駆け込んだ。

「大変なことって急ぐことなのか？」

「多分ね。杉並君の手に渡ったのがいつかわからないから、急いだからいいと思うの」

そう言って、二人は学校を早退した。

さくらの家

「まさか2人だけで行くのか？」

ゲームの準備をしているさくらに純一は言った。

「連れてこなくても向こうで会えるよ。それにその方が、前みたい
に夢ということで誤魔化せるし」

さくらはそう言いながら、着々と本体の準備をした。

「できた！」

さくらはそう言って、ディスクをセットして、電源を入れた。

ゲームの世界へようこそ

あのとときと同じ文が真ん中にドでかく、赤い字で表れた。
しばらくして文字が前みたいにな変わった。

準備完了

つと・・・

その瞬間画面が光だし、辺りが真っ白になり、ゲームの世界へ吸い込まれた。

視力が戻り、辺りを見渡すと、見慣れた部屋にいた。

前回の本拠地として使われた家だった。

部屋の模様は前回と変わりなくベッドと机とその机のパソコンしかなかった。

さくらは、純一よりさきに目覚めていてパソコンに向かって何かしていた。

「また仲間集めか？」

純一はさくらに言った。

前回は初音島の仲間を20人集めなければならなかったが、今回は……

「違うみたい。仲間への指定はないみたい。今回はみんなゲストキヤラみたいだね」

さくらがそう言って、パソコンから離れた。

「そう言えば、ここで自分のステータスを見れるんだったよな？」

純一はそう言い、自分のステータスを見た。

朝倉純一 中級魔法戦士

レベル48

HP	780	MP	700
攻撃力	570	防御力	450
魔力	790	魔防	930
精神力	897	敏捷性	430

「よっしゃー前回の能力全て引き継いでる。これだったら楽勝だな。中級魔法剣士もまあまあだな」

純一は満足そうな顔をして、パソコンを閉じた。

「あ、お兄ちゃん！今はパソコンからじゃなくても、これで相手のステータスとか見れるから」

さくらはそう言って、純一に携帯みたいなアイテムを取り出し「それを、相手に向かって、赤いボタンを押せば、その人のステータスを見れるんだ」

タスが見れるし、記憶もできるよ」

さくらは純一にそのアイテムを手渡した。

ステータスチェッカーを手に入れた

「じゃあさくらのステータスでも見てやるか」

純一はそう言い、ステータスチェッカーをさくらに向けてボタンを押した。

芳乃さくら 特級魔法使い

レベル7859

HP 2985

MP ***

攻撃力 894

防御力 1008

魔力 8641

魔防 9570

精神力 8190

敏捷性 1900

「なんじゃこれ！」

純一は目を疑った。

「うにゅ？ ああ、上限が9999に変更になったんだね」

さくらが普通に言った。

「特級ってなんだよ？」

「あゝ同じ職種の中にも、見習い↓低級↓中級↓上級↓超級↓特級に別れてるんだよ！」

前のお兄ちゃんは見習いだったからすごいレベルアップしてるね！」

さくらが喜びながら純一に言った。

「あまり嬉しくないし・・・それに前から思ってたんだけど、攻撃力やら防御力とか出されても、よくわからないんだよな」

「うゝん、じゃあお兄ちゃん専用に改造してあげる」

そう言ってさくらは先ほどのステータスチェッカーをいじりだした。

「はい、これでわかりやすいと思うよ」

改造されたステータスチェッカーを受け取り、純一はもう一回さくらに向けた。

芳乃さくら 特級魔法使い

次元違い

ステータス全てが次元違いにまとめられていた。

「数値じゃなくて言葉で強さを表すようにしたから、これで大丈夫だね。」

因みに強いとか弱いとかの基準はお兄ちゃんになってるから」

っといういろ説明されたが、多分使うのは序盤だけだろうと思い、聞き流した。

「説明はもういい。それじゃあまずは、あの時世話になった帝国の奴等に会いに行くか」

純一はさくらに言った。

「ボクは他のみんながここに戻ってくるかもしれないから、待機しとくよ」

さくらがそう言って、外に出た純一に手を振った。

「俺一人で行動か・・・まあレベル48もあるから大丈夫か」

純一は軽く考えながら、町の外に出た。

「よお兄ちゃん！命が惜しければ金よこしな！」

速攻10人グループに因縁つけられてしまった。

ゲームで言えばモンスターみたいな感じだ。

敵大将 上級ゴロツキ

強い

敵部下×9 中級ゴロツキ

そこそこ強い

「部下でもそこそこ強いのか！しかも大将は俺よりランクたけえのか」

純一はそう叫びながら剣を構えた。

「ん？俺らに逆らうか？」

そう言いつつ、ゴロツキ達は斧を取り出した。

「何も知らずにノコノコと一人で歩きまわってたことを後悔させてやるぜ」

ゴロツキたちそう言って、純一に襲い掛かってきた。

プロローグ（後書き）

純一.. またこの物語が始まったか

作者.. 嫌か？

純一.. 当たり前だ！俺を何回九死を味わえっていうんだ

作者.. あと5回

純一.. おい！

現代編：旅立ち

「敵はたった一人だ！さっさと身包み這いしまえ！」

ゴロツキの親玉がそう言いながら、鉞を振り回してきた。

「10対1じゃあかなり分が悪いけど、素早さはまだこっちのほうが上だ！」

純一はそう言って、一人一人の攻撃をかわしながら、確実に倒していった。

「調子に乗るなよ！ガキが！！」

【鉞強化！】

そう言った瞬間、親玉の武器が2mほどでかくなった。

「そんなにでかかったら、リーチの長さも分が悪いな・・・」

いつの間にかゴロツキの部下は全滅し、純一と親玉だけになっていた。

「俺もやってやるぜ！魔法剣！」

【ファイアーソード！】

・・・

純一が剣の峰に手を当て、そう言ったが何も起こらなかった。

「っへ、びびらせやがって！」

呆然としてた純一に、ゴロツキは不意打ちをかました。

「ぐはっ・・・！」

『純一は5340のダメージを受けた』

っておい！攻撃力高すぎだろ。

俺はそのまま抵抗もできず意識を失った。

「てこずらせやがって！野郎共！さっさと起きやがれ！」

ゴロツキの親玉は部下を起こし、純一のアイテムや装備、全て奪っていった。

「俺はすごい慈悲深い人間だからな。これをくれてやる！俺のお下がりがだが感謝するんだな」

『汗臭い囚人服を手に入れた』

数時間後、純一は目を覚まして、全ての装備を奪われてたのに気づき、急いで近くにあった囚人服を着た。

「初戦からあんな強いのはなしだろ・・・」

純一はそう呟き、一旦さくらの所に戻ろうかと考えたが、

「ここからなら帝都のほうに近いな」

そう判断した純一は、帝都に急いだ。

「ここもずいぶん変わってないなあ」

なんとか、武器も持たずに、フィールドを抜け、帝都にたどり着くことが出来た。

「さて、いろいろ見て回りたい所だが、まずは帝国本拠に挨拶にかねえとな」

純一は帝都の出店を素通りし、帝国本拠の入り口の門前まで来た。

「帝王に取次ぎを願いたいんだが」

純一は見張りの兵士にそう言った。

「はあ？お前本気で言ってるのか？？」

兵士はそう言いながら、純一の服装をまじまじと見つめた。

その後、奥にいた兵士と相談し、数秒後戻ってきた。

「そんなみすばらしい格好をしてる奴と、会わず訳にはいかん！さあ帰った帰った！」

「待ってくれよ！会わせてもらえればわかるって！」

兵士は純一を追い出そうとして、純一は抵抗した。すると槍をのど元に突きつけられ、

「ここで死にたいのか？」

兵士風情に脅されて、純一はしぶしぶ、帝国本拠を後にした。

「ここからさくらの所に戻れるかな？」

純一はそう考えながら、帝都をぼんやり歩いていた。

今の純一はゴロツキに武器も金も全て奪われたせいで、戦う術がないのだ。

だから、もしさくらの所に戻るまでに、敵と遭遇してしまえば、死あるのみ、状態なのだ。

「ブチ殺すぞゴラァ！！！！！」

純一の目の前で、何かゴタゴタが起きてるみたいだ。

それを興味本位で純一は、町民に紛れて覗き込んだ。

「何回言えばいいんだよ？俺は子供の前で人殺しする主義はないんだよ」

大声を上げているのは、あのゴロツキの部下30人だった。どうやら親玉はいないらしい。

「この子の前では、戦いたくないんだ。だからここは身を引いてくれるかな？」

中学生っぽい男の子がゴロツキ30人を見上げながら言った。

よく見るとその男の子の傍らに、小学生ぐらいの少女が怯えていた。

「貴様、まだ自分が置かれてる状況が、わからねえみたいだな！！」
ゴロツキそう言い、斧を振り上げ、少年に切りかかろうとした。

「ぐはぁ！」

「貴様は……」

純一は一心不乱に、そのゴロツキに殴りかかっていた。

「子供2人に、大の大人が大勢そろって襲うとか、みつともなくねえか？」

純一はゴロツキにそう言い、落ちた斧を拾い、構えた。

（うわー斧なんか握ったこと無いのに戦えるのかよ。しかも思ったより重たい……）

そんな弱気な考えをしても、ゴロツキは容赦なく、純一に襲い掛かった。

「お兄ちゃん！」

少年に叫ばれ、何かの剣で切られたと思ったら、急に身体が軽くなった。

（これだったら、勝てそうだ！）

純一はものすごい速さで、ゴロツキを斧で殴っていった。

「覚えとけよ！」

「よし！死人0！」

ゴロツキはお決まりのセリフを吐き捨て、逃げていった。

純一は予想外の、自分の強さに満足し、余裕っぷりを、野次馬町民にみせつけた。

「兄ちゃん！見た目と違ってやるじゃねえか！」

「いいもん見せてもらったぜ！」

町民はそう言いながら、純一に小銭を投げてきた。

今思えば、純一の服装は、ボロボロの囚人服に裸足で、すごいみすばらしい格好だった。

「お兄ちゃん、助けてくれてありがとう」

少年と少女は純一にお礼を言った。

「光喜お兄ちゃん。お腹すいた」

少女が少年の袖をひっぱって言った。

「もう残りの資金も少ないから、我慢してくれられないかな？」

「いや！」

少年が少女のわがままを宥めてるのを見ていた純一は、

「よかったら、この金で何か食いに行かないか？」

野次馬町民がくれた、小銭を拾い、純一は言った。

「いいの？」

「ああ」

純一はそう言い、近くのレストランに寄った。

「あ、自己紹介がまだだったね。俺の名前は陽河光喜。この子はリム」

光喜らがレストランのイスに座って自己紹介した。

純一はステータスチェッカーで光喜達のステータスを調べようとした。

あれ？ない。

そういえば所持品すべてあのゴロツキに盗られてたんだ。

所持金は大して持ってなかったから気にしてなかったけど、あのアイテムは盗られてよかったのか。

「お兄ちゃんどうしたの？お金足りないの？」

純一が落ち込んでる時に、リリムが慰めに来た。

「ん？ああ、気にしないで好きなもの頼めよ」

純一は笑顔でそう言い、光喜とリリムは子供のようにメニューを眺めた。

「お待たせしました！このみ特製カレーであります！」

まだ注文もしてないのに、ウェイトレスが緑色のカレーを持ってきた。

「こんなの頼んでないんですけど？」

純一が運ばれたカレーに指を指しながら言った。

「これはサービスなのでお金はいらないでありますよ」

そう言って、奥の部屋に戻っていった。

「なんで野菜カレーでもないのに、緑色なんだ？」

純一はそんなこと呟きながら、食べようとした時

「邪魔するぞ！」

ドでかい男がそう言い、レストランに入ってきた、あのゴロツキの親玉だ。

「またお前か？生かすべきじゃなかったな」

そう言いながら、純一の方に歩み寄ってきた。

「光喜！リリム！ここは・・・」

純一が振り向くと、先に避難していて、2人は奥の机に座ってウェイトレスと話してた。

「俺はチョコレートパフェ」

「リリムはイチゴパフェ！」

ノンキにパフェなんか頼んでいた。

「この際見せしめで、お前を血祭りにあげてやる！」
(今の俺は丸腰なんですけど・・・)

現代編：旅立ち（後書き）

魔女狩りにも登場している、陽河光喜ですが

このキャラとリリムはRYOさんの『ツイン／＼クエストヒーローズ？』から借りたオリジナルキャラクターです。

もしよかったら、読んでみてはいかがでしょうか？

純一…これからもいろんなところからキャラクターを連れてくるみたいだが、いいのか？

作者…ちゃんと許可はもらっているから大丈夫ハハハ

この物語のもうひとつの利点は「なんでもあり」だから

純一…確かに、なんでもありすぎて怖いくらいだ

作者…気にするな、それでは次回もお楽しみに！

すかいてんぷる

「せっかく生かしてやった恩を仇で返しやがって!」

親玉ゴロツキは純一に向かって、思いっきり鉞を振りかぶった。

シュルシュルシュル・ゴン!

どこかからか、鍋蓋とまな板が飛んできて、純一と親玉ゴロツキの頭に激突した。

「誰だ!この俺様にまな板なんかぶつけやがったのは!」

ゴロツキは標的を変え、まな板が飛んできた方に向かって叫んだ。
「うるさいわさ!」

奥の部屋から出てきたのは、黄色い髪ของ ツインテールの女の子だった。

その後ろに、ショートヘアーの女の子が隠れるようにいた。

「まゆ!」

ツインテールの子がそう言うと、後ろにいたショートヘアーの女の子が薙刀を持ってきて渡した。

「2人とも営業妨害で地獄に送ってやるわさ」

そう言って、ツインテールの女の子が薙刀を構えた。

「俺を殺るだど?おもしろい!かかってこい」

ゴロツキはやる気満々だが、純一は必死に白旗を振っていた。

「俺は関係ないです」

部屋の隅っこで小さくなって振っていた。

「朝倉、かっこわるいよ」

光喜がチョコレートパフェを片手に持ちながら、リリムと共に朝倉の所へ歩み寄った。

「武器もねえのに、戦えるはずないだろ!」

純一がいいわけしてる中、そのツインテールの女の子と、ゴロツキはイイ勝負をしていた。

「うおーやれやれ!」

「戦う所初めて見たぜ・・・」

「クソくビデオもってくりやよかった」

客たちがそんなことを言いながら、白熱した戦いを見ていた。

「女のくせになかなかやるじゃねえか！」

「ああ？あんたは男のくせに全然弱いわさ！」

ピキッ

女の子の言葉でゴロツキの顔が急変した。

「俺が弱いだと？調子に乗ったこと言ってくれるじゃねえか！うお
おおおおおおお！」

ゴロツキは一旦間合いをとり、鉞に力を込め始めた。すると段々
金色に変化していった。

「さっさと終わらせろ！このバカめが！」

左右に3つみつまみをしているウエイトレスが、3メートルほど
あるハンマーでゴロツキを叩き潰した。

ゴロツキは壁にめり込み、戦闘不能になった

「人の獲物を勝手にとるんじゃないわさ！」

「おまえがちまちまやってるのが悪いんだろ！」

ゴロツキを倒せたものの、今度は2人のウエイトレスがケンカを
始めた。

「でたでた。ここの名物、ツンデレウエイトレス同士の戦い」

「はあ？ツン？デレ？」

客達はさっきと態度が異なり次第に盛り上がってきた。

「なああんたさっきなんて？」

純一は身近な客に訊ねた。

「ツンデレ同士の戦いだよ。あの左右にみつあみしてるのが蟹沢き
ぬって子で、

もう片方が大空寺あゆって子なんだ。二人は犬猿の仲でその二人の
争いを見に来る人は少なくはないと思うよ」

つと二人のケンカに見とれながら、純一に説明した。
確かに近くにいるだけで、強さは伝わってくるけど、純一から見たらどんぐりの背比べみたいなしょぼいケンカだった。

「微妙に強いが、ツンデレってなんだ？」

純一も客と一緒に二人のケンカを観戦してる最中、見たことある姿が純一の目に入り込んできた。

入り口に緑髪でサングラスをした男が立っていて、純一は戸惑いを隠せなかった。

「大志・・・」

「我が兄弟をここまで痛めつけてくれるとは、驚きだぞ」

大志がゴロツキの首に手を当て、そう言った

「おまえも邪魔するなら、そいつみたいにしてやろうか!？」

蟹沢が大志にそう言い、ハンマーを振り上げた。

「あいにく、レディーを傷つける刀は持ち合わせていなくてな・・・」

「「うっ」」

大志がそう言った瞬間、あゆと蟹沢が倒れた。

「一体なにをしたんだ・・・」

純一には、大志の動きがまったく見えてなかったが、光喜には見えてたらしい

「瞬間的に彼女の背後に回り、刀の柄で軽く突いたんだよ・・・。
まだあんなすごい人がいるなんて」

光喜がそう言った。

「非常事態であります！戦闘員2人がやられてしまったであります
！」

ウェイトレスのこのみが、誰かと通信を取っていた。

「無益だが、この店潰しとくか・・・」

「うわぁー」

大志がそう言った瞬間、客たちが全員逃げ、俺と光喜とリリムだ

「こうなったら、この店の最終兵器！ やっっちゃって下さい！ であります」

「本当にやっちゃっていいんですか？」

腰まである栗色のロングヘアーで、すごい美少女だった。

「許可は出てるみたいですね．．．それじゃあ．．．ミ、ミ、ミ
クルビーム！」

彼女は左手でVサインを作り、左眼の横に置いて、ウィンクした。
・・・その瞬間

「ぐわ！」

純一に流れ弾が当たり7億4千538のダメージ

純一は息絶えた

「凝集光のフォトンレーザーといった所か？　こんな一撃必殺を出せる奴がいるとはな……ここは一旦退かして貰う」

大志はそう言い、左手で、ゴロツキを掴んで出て行った。

「小牧愛佳 すかいてんぷるの危機により、援軍に駆けつけました・
・っでもう終わったみたいです」

帝国の武装をした女の子が数人の兵士を連れ、レストランに入ってきた。

「皆さん、治療が必要みたいですね．．．あ、あなたは．．．」

「大変危険な状態です！この方を優先にお願いします！それと工藤

皇帝にも報告をお願いします！」

純一は帝国の医務室に運ばれた。

その頃光喜たちは・・・

「みんななくなっちゃったけど、パフェ代払わなくていいのかな？」

未だにレストランにいた

すかいてんぷる（後書き）

純一「おい！なんで大志が1万で俺が7億もダメージ食らうんだよ！」

作者「防御力の差！ミクルビームはそれほど危険っていうことをわかってほしかったんだよ」

純一「そのためだけに、俺の命を消しかけたのか・・・」

作者「後、数回死んでもらうけどね」

純一「はぁ・・・それじゃあ今回初登場のキャラクターはこちら！」

大空寺あゆ、玉野まゆ

登場作品「君が望む永遠」

朝比奈みくる

登場作品「涼宮ハルヒの憂鬱」

今回は苗字も紹介されず少ない出番でしたが、今後主要キャラになってきます。

蟹沢きぬ

登場作品「つよきす」

九品仏大志

登場作品「こみつくパーティ」

前作ダカーポクエストにも杉並と一緒につるんで出てきてます
小牧愛佳

登場作品「To Heat 2」

前作ダカーポクエストにも、帝国の秘書として出てきてます。
合計6名です

作者「次回はやっと帝国に入れた純一！新キャラも続々！」

帝都

「ここは・・・」

純一が目覚めた場所は、どこかのベッドの上だった。

「気分はどうですか？」

茶色い髪の女の子が、ベッドの横のイスに座っていて、目を覚ました純一に声をかけた。

「愛佳か？^{まなか}つということは、ここは帝国の・・・」

「医務室ですよ」

純一が言う前に、愛佳が笑顔で答えた。

「起きたんだったら、さっさと着替えさせて、王座の前に来させろ」
薄紫の髪の毛の着物を着た女の子が、部屋に入ってきてそう言った。

「真夜さん、お久しぶりです」

純一はその子に向かって挨拶した。

「挨拶などどうでもよい。なんじゃ？そのみすぼらしい格好は？」

真夜が純一の格好をマジマジと見ながら言った。

「あの、朝倉さんはまだ怪我人で、安静が・・・」

「こんなナマケモノに安静にさせとく時間が無駄じゃ！さっさと王座まで連れてくるんじゃぞ」

そう言って真夜は医務室から出て行った。

「それじゃあ私も・・・」

愛佳がそう言い、部屋を出て行くとしたとき、

「朝倉純一！勝ち逃げとか卑怯よ！ここが会ったが100年目今日こそは・・・」

青髪のショートヘアの女の子が部屋に入ってきた。十波由真だ。

「由真！待ってくれ！ってか今の俺、丸腰なのにどうしろと？」

純一が必死に訴えてるのにもかかわらず、剣を抜き、今にも襲い掛かろうとしている由真を、愛佳が抑えて部屋に追い出した。

「はあ、みんな変わってないな」

純一はため息をつき、近くにあった帝国將軍の服装に着替えた。

帝国將軍のフル装備を手に入れた

着替えた純一は、王座の間に向かった。

「朝倉純一様がお見えになりました」

見張りの兵士が、王座の間に向かって叫んだ。

純一はそれと同時に、王座の間に入った。

「朝倉！・・・よかった、朝倉が戻ってきてくれて・・・」

王座に座っていた工藤が純一に駆け寄った。

「工藤どうしたんだ？」

「この夢から覚める方法を知ってるのは、朝倉だけだろ？だから探してたんだよ」

一応ここはゲームの世界なんだが、元の世界に戻った時のことを考え、皆には夢ということにしている。

真実を知ってるのは、純一とさくらだけだ。

「それでも工藤は皇帝なんだろ？どしっと構えとけばいいんだよ」

純一はそう言い、工藤を王座に座らした。

「つで、工藤に聞いてもわからないと思うから、真夜！今この世界はどうなってるんだ？」

純一が王座の横で立っている真夜に聞いた。

「どこから話せばいいかのお・・・」

真夜が腕を組み、俯きながら考えていると、

「朝倉さん達が帰った後、私達は帝国と王国は手を取り合って、平和な日々を送ってたんですよ」

真夜と反対側に立っている、由真の隣の愛佳が言った。

「でも突然、その平和が奪われたのよ」

由真が言った。

「魔界の奴らが性懲りも無く、攻めてくるんですよ」

愛佳が窓から外を見ながら言った。

「でも確か、魔王は倒したはずじゃあ・・・」

「魔王を倒しても、また新たな魔王が誕生する。魔界そのものを潰さなきゃ、根本的な解決にはならないのよ」

つと由真が言った。

「そういえば、それもあるが、もう1つ問題があったんじゃない」

真夜が顔を上げて言った。

「去年から反乱軍が結成されてな。着実に領土をふやしてきているのだ」

「反乱軍？」

純一は聞き返した。

「ああ、兵の数も着実に増やしていき、今では王国と帝国の3倍以上の兵力を持っている」

真夜が淡々と言った。

「どうして、そんなになるまで放っておいたんだよ？」

「おかしいことに、うまいぐあいに、魔界と反乱軍が同時に攻めて来るんですよ。それで、反乱軍のほうは放置したら、こんなことに・・・」

愛佳が悲しそうな顔で言った。

「それで治安も悪いのか。この帝都ゴロツキがやけに多かったし・・・」

純一が納得しながら言った。

「そいつらは、兵も領地も持たない中立者だ。それに絶対に敵に回したくないやつらだ」

真夜が言った。

「その中立者には杉並もいる。今、味方になってくれないか頼んでる所なんだよ」

工藤がそう言った。

「大志と杉並がまた一緒になったのか、こりゃ厄介だな・・・」

魔界に反乱軍に中立者、こりや当分帰れそうにないな」

朝倉はそう呟き、一旦さくらの所に戻ろうと思った。

その時、扉が開き、見張りの兵士が入ってきた。

「工藤陛下に仕官を願う将が来ておりますが・・・」

「通してくれ」

工藤がそう言ったら、兵士は何か合図をし、もう一人の兵士が、純一が見知った子供を二人連れてきた。

「光喜！リリム！」

「あ、朝倉！」

純一と光喜の目が会った瞬間、

「パフェ代払ってから死ね！」

「しね！」

光喜はそう言いそっぽを向いた。リリムも光喜が言った言葉の最後の言葉だけ真似て、そっぽを向いた。

「知り合いか？」

「まあな」

工藤の問いに純一は、生返事で答えた。

「光喜といったな？そちが強いのは氣でわかるが、何か特殊能力はあるのか？」

真夜が光喜に近づいて言った。

「うわゝ俺より小さいや！」

光喜が珍しそうに真夜を見つめた

「質問に答えろ」

真夜はまったく動じず光喜に言った。

「時間操作かな」

光喜がそう言った瞬間、由真のまゆがピクツと動いた。

「今なんて？」

由真が光喜に真顔で言い、剣を抜いた。

「だから、時間・・・」

「時間操作できるのは私だけでいいのよ！」

光喜が言いかけた瞬間由真は、剣を光喜に向けた。

「出て行きなさい！今度あなたの人生という時を止めるわよ」

由真が真剣な顔で言った。

「おい！何をムキになってるんだよ！」

「そうだよ由真！落ち着いて」

純一と愛佳は、必死に由真を止めようとしたが、身体が動かなかつた。

由真に純一と愛佳の周りの時間を止められてたからだ。

工藤は、どうすればいいか、戸惑っている。

「大した魔力もないくせに、偉そうなと言うなよ！俺のアイオーンの力を見せてやる」

光喜はそう言い、剣を召喚した。

「どうやら死にたいみたいね」

由真がそう言った瞬間、由真と光喜の間の景色がコロコロ変わリ、おかしくなってきた。

「おい！そんなことしたら、時空の歪みが」

純一がそう言ったが、時は既に遅し、

その時空の歪みに、純一は吸い込まれてしまった。

「愛佳！後の片付け頼んだぞ」

真夜はそう言い、純一を追いかけて時空の歪みに、自ら飛び込んだ。

「うわ~~~~」

純一は吹き飛ばされ、仰向けになって倒れた。

「おじいちゃん？どうしてこんな所で寝てるの？さくらさんの家に行ったんじゃないの？」

2人の女の子が純一の目の前に立ち、そう言った。

「由夢？音姫？ここは・・・」

純一は起き上がって、辺りを見渡すと、そこは朝倉家の家の前だった。

「どうしたんだ由夢？音姫？」

家の中から、おじいさんが出てきた。未来の純一だ。

その未来の純一は、過去から来た純一を見て、傍らにいる、真夜を見て、頷いた。

「そうか、もうこの時が来たか・・・由夢と音姫はそのままさくらの家に行きなさい」

未来の純一はそう言って、由夢と音姫を見送った。

「さて、君はここに来るのは2回目だね。まあ上がっていきなさい。真夜も一緒に」

そう言って、家の中に入って行った。

「わしはあんなジジイ見覚えがないんじやが、一体誰だ？」

「真夜は純一を見上げながら言った。

「俺だよ。50年後のな」

純一はそう言い、朝倉家の家に入った。

「さて、どこから話そうかのお」

リビングのイスに向かい合わせに座り、おじいさんが言った。

「今、この時間帯は、朝倉純一という人間は私と君を含めて5人いる」

おじいさんは、真面目な顔でそう言った。

「俺が5人・・・それじゃあ他の3人はどこかにいるってことで・・・」

純一はしばらく考え、

「ってことはあと3回、俺はこの世界に来ると？」

純一がそう言うと、おじいさんは、何も言わずただ笑っているだけだった。

「お兄ちゃん！お兄ちゃんと由夢ちゃん達を過去に送ってきたよ！」

さくらが玄関でそう叫び、リビングに入ってきた。

「うにゃ！ここにも昔のお兄ちゃんが！」

さくらが、ビックリした顔で言った。

「さくら、もうあれが起こるんじゃ。今すぐ手配してくれんかの？」
「うん。わかったよ」

さくらはそう言い、急いで家を飛び出していった。

「それで、俺が5人って？」

純一はあの話をもう一回切り出した。

「今はもう4人だ。さっき過去に帰ったらしい。それが始めてここに来た君じゃ！覚えておるか？由夢と音姫を連れて行ったじゃろ？」

未来の純一は懐かしみながら言った。

「それじゃあ後の3人は・・・」

純一がそう言うのと、また黙ってしまった。

「何とか言ってください！」

「未来が変わるから、詳しくは言えんが、明日君はさくらと義之君と一緒に、学校に行ってもらう。真夜はわしと留守番じゃ」

やっと出た言葉はそれだった。

「意味がわかりません」

純一が問いただしても、また未来の純一は黙ってしまって、席を立った。

「今日は私の部屋で寝なさい！それじゃあ、義之君たちを頼んだよ」
そう言って、家を出て行ってしまった。

「またややこしくなりそうじゃのお」

真夜はノンキにくつろぎ、眠りに入った。

「なんで俺が50年後まで来て、学校に行かなきゃなんねえんだよ」
純一は愚痴りながら、しぶしぶ、自分の部屋・・・未来の純一の部屋に向かった。

帝都（後書き）

この回は前作を読んでいないと、わからない回になっていますが、物語にはほとんど関係ないので気にしないでいいです。

未来編：序章

「はぁ・・・かったる」

純一は50年前の古びた制服に袖を通して、さくらと学校に向かうため、桜並木を歩いていった。

「うにゃ？せっかくの学校だよ！懐かしくないの？」

「俺はまだ現役学生だっつーの！それにどうして50年経った今でも制服が変わってないんだよ」

「それはお兄ちゃんはその制服が一番似合うからだよ。ブレザー着たお兄ちゃんなんて想像できな・・・あ、できた」

「できたのかよ」

そんな他愛ない話をしながら、学校まで歩いていった。

「学園長、おはようございます！」

校門前で、3人組みの女の子がさくらに挨拶をした。

「あれ？その子、新しい転校生？」

ピンクのロングヘアーの子が言った。

「うん！後で紹介するね。茜ちゃん」

そう言って、純一とさくらは先に学校に入って行った。

別れる際、オレンジの髪の子が微笑みながら、純一に向かって手を振ってくれた。

「50年後の風見学園もいいかも・・・」

「ほら！鼻の下伸ばしてないで行くよ！お兄ちゃん!!」

さくらが『おにいちゃん』をものすごく強調して言って、純一を引っ張っていった。

「じゃあお兄ちゃん。お兄ちゃんはこれから、音姫ちゃんと由夢ちゃんの遠い親戚ってことにしてあるからね。

それと、今のお兄ちゃんのこと知ってる人がいるから、名前は変えといたよ」

今のお兄ちゃんというのは、この世界の純一、つまりおじいちゃんになってる純一のことを指している。

「そのお兄ちゃんって言うのも、変えないか？ わかりにくいだろ？ この世界の俺と」

「お兄ちゃんはお兄ちゃんのままでもいいの」

そう言われながら学園長室でいろいろ、書類をまとめ、そのうちの一枚を純一に見せた。

「名前のどこが変わってるんだ？」

パッと見、何も変わってる所はなかった。

「ちゃんとよく見て！」

さくらが忙しそうに言った。

純一はその書類の、目を凝らしてみると・・・

「おい！ 朝倉鈍一ってなんだよ！」

皆さんはお気づきだろうか？

純一の純が糸偏じゃなく、金偏の鈍に変わっていた。

「しかも読み方が『どんいち』とか最悪じゃねえか！」

「ちよつとの間だから辛抱して！ ほら、行くよ」

さくらは鈍一から書類を奪い、付属3年の教室に向かった。

「俺、もう本校生徒なんだけど・・・」

「細かい所は気にしちゃだめだよ！」

よくく思い出してみると、年齢の欄も変わってたような気がしてきた鈍一であった。

「つということでもよろしくお願いします」

一通りの挨拶を終え、鈍一の席は義之の後ろになった。

休み時間、あの校門の前であった3人組が鈍一に近づいてきた。

「ねえねえ、鈍一君は、彼女とかいるの？ いないんだったら、好きな人とか？」

茜が真っ先にそういう話題を振ってきた。

「いいよなあ、音姫先輩と由夢ちゃんの親戚とか・・・ちきしよ

「羨ましいぜ！」

渉が一人で勝手に叫んでいた。

「私は月島小恋。改めてよろしくね」

さっきのHRで、全員の自己紹介をし終えたにもかかわらず、小恋はもう一回鈍一に自己紹介した。

「どうも！朝倉じゅ、あ、鈍一です」

鈍一はデレデレしながら言った。

「ははぁくん。そっか。そういうことかぁ」

茜がニヤニヤしながら小恋に言った。

「え？え？何？」

小恋が戸惑いながら言った。

「もう義之は飽きちゃったんだ。可愛そうな義之」

杏が義之を見ながら言った。

「えゝそんなじゃないよぉ」

小恋は必死に弁解した。

「おい、ドン！月島は俺が前から予約してるんだから、横取りするなよな！」

渉が鈍一のことを呼び捨てにし、人差し指を指して言った。

「小恋にとって渉は脈なしだから、全然気にしなくていいから」

杏が鈍一に言った。

「ぐわああああああ」

渉が腕で、目を隠して、泣き真似をしながら教室を出て行った。

「杏に傷物にされたー」

恐ろしく誤解を招く言葉が廊下中響いた。

「あゝあ、杏ちゃん、板橋君とウワサになっちゃうよ」

茜が心配そうに杏に言った。

「馬鹿は馬鹿なりに、勝手に躍らせとけばいいのよ」

杏は冷静に言った。

結局、渉は放課後まで教室に戻ってこなかった。

放課後

「桜内、朝倉、今からヒマか？」

杉並が鈍一と義之に声をかけてきた。

言っておくがこの杉並は、あの杉並ではなく、この時代の杉並だ。

「桜内、この前、美夏嬢がいた洞窟があっただろ？そこからうめき声が聞こえると噂が、我が非公式新聞部で持ちきりでな、

そのうめき声の正体を、明かそうと思うのだがどうだ？」

「却下」

鈍一と義之が同時に即答したが

「そうかそうか！お前たちがそこまで、興味を持ってくれて嬉しいぞ」

「話がかみ合っていないんだけど」

「言うだけ無駄だ。杉並はこういう奴だ」

そう言って、鈍一達を強制的に連れて行った。

「つで、何でお前たちもついてきてるんだ？」

義之が後ろを振り返って言った。その先には

渉、小恋、茜、杏がいた

「だっておもしろそうだし」

「興味本意よ」

「私は別に来たくなかったんだけど・・・」

「月島の側には渉あり！ってか？ってことで、俺も行くぜ」

それぞれの意見を言うだけ言って、後は堂々としてきた。

洞窟をしばらく歩くと、ホールみたいな広い場所にでてきた。

「今はカプセルはないが、ここに美夏嬢が眠っていたんだ」

つと杉並が解説してる中、

「ねえ、あのゴソゴソ動いてる赤い物体なに？」

茜が赤い生き物に指を指して言った。

ゴブリン 魔物

レベル1	
HP	12
MP	0
攻撃力	18
防御力	9
魔力	0
魔防	0
精神力	0
敏捷性	10

「うむ、この程度なら俺達でも対処できるな」

杉並は何か変な機械の画面を見ながらうなづいた。

「それって、ステータスチェッカー」

鈍一はそれに見覚えがあり、杉並が持っていたステータスチェッカーを覗き込んだ。

誰が見ても明らか、鈍一のほうが強いことがわかった。

「イヤアーアー」

後ろから小恋の叫び声が聞こえた。

どうやら囲まれたみたいだ。

「月島！」

渉が小恋を庇うように、仁王立ちした。

「ざっと30匹って所か・・・」

杉並が冷静にそう言った。

「ってかどうするんだよ！俺こんな所で死にたくないぞ！」

義之が杉並を責めた。

鈍一は一応みんなのステータスを計ってみた。

桜内義之 見習魔法使い

レベル1	
HP	21
MP	6
攻撃力	10
防御力	10
魔力	15
魔防	8
精神力	11
敏捷性	19

板橋渉 見習剣士

レベル1

HP	25	MP	0
攻撃力	14	防御力	19
魔力	0	魔防	0
精神力	0	敏捷性	22

杉並 中級暗黒戦士

レベル320

HP	1100	MP	900
攻撃力	950	防御力	980
魔力	910	魔防	800
精神力	700	敏捷性	1500

「雪月花3人は非戦闘員か・・・こりゃ杉並だけが頼りだな・・・
ってどこ行った？あいつ」

辺りを見渡すと杉並の姿のみ消えていた。

「囲まれてるのに、どうやって逃げたんだ？その前に俺より強いく
せに逃げるなよ」

鈍一はそう呟いた瞬間、

「ぐは！」

渉は20のダメージを受けた

「渉君！」

小恋が吹き飛ばされた渉の側に駆け寄った。

「ブブー」

ゴブリンはそう叫んで、渉と小恋をに棍棒を振り下ろした。

鈍一は素手でゴブリンの攻撃を受け止めた

「ゴブゴブゴブゴブ！」

「鈍一くん！」

「鈍一~~~~！」

ゴブリンの標的は鈍一に変え、集中攻撃を受け、リンチされた。
「うざいんだよ！」

鈍一は0のダメージを受けた

相手はレベル1のゴ布林、レベル48の朝倉は、どんなにボコボコにされてもダメージは無かった。

「なんか、この世界に飛ばされた意味がわかってきたぜ」

鈍一はそう呟き、一匹のゴ布林から棍棒を奪った。

「さあ、さっさと片付けるか！」

未来編：序章（後書き）

未来編での純一はおじいちゃんになってしまった方の純一のことです、主人公純一のことは鈍一で表しています。（未来編限定ですけど）

洞窟での戦い――1

「雑魚はどいてろー！」

「ゴブー」

鈍一の一撃でゴ布林達はドミノ倒しみたいに倒れていき、半分以上たおした。

「鈍一！こっちの援護も頼む」

義之がゴ布林2体と苦戦しながら言った。

「任せとけ！」

鈍一は一振りですべて同時に倒した。

「鈍一君！小恋ちゃんと涉くんが・・・！」

茜が残りの10匹のゴ布林を指を指して言った。

よく見ると、ゴ布林の足の隙間から、涉の足としゃがみ込んでる小恋の姿が見えた。

（この距離じゃあ間に合わない！クソ！俺に遠距離攻撃ができれば・・・）

鈍一が一瞬そう考えていると、

「お前ならできる！自分を信じろ」

どこからか声が聞こえ、さくらに預けてたはずの帝国の剣が上から降ってきて、地面に突き刺さった。

「考えてる時間は無いな」

鈍一はそう呟き、剣を引き抜き、後ろに構えた。

【真空飛残撃】

鈍一がそう言い、剣を思いっきり横に振ると、大きなカマイタチがゴ布林達を襲った。

「ゴブーーーーー」

「うわーーーーー」

ゴ布林は消滅した

渉はカマイタチの余波に当たり5のダメージ。渉は戦闘不能になった

「流石は俺が見込んだ男だ」

杉並が鈍一の背後から現れた。

「お前今までどこにいたんだ？」

「トップシークレットだ」

杉並のその言葉を聞き、鈍一はため息をついた。

「義之！鈍一君！杉並君！渉君が・・・」

小恋が泣きそうな声で、鈍一たちを呼んだ。

「死んでるな」

「ああ、死んでる」

鈍一と杉並は渉を見て冷静に判断した。

少しは驚いた方がいいか迷ったが、あまりにも杉並が冷静だったので鈍一も負けんと冷静を保った。

「そんなこと言わないで助けてあげてよぉ」

「心臓はまだ動いてるわ。ちゃんと応急処置を施せば助かるわ」

杏が渉を診断してそう言った。

「人工呼吸でもしてみたらどうだ？」

杉並がニヤニヤした顔で言った。

「え？え？誰がするの？」

小恋が戸惑いながら言った。

その瞬間みんなの視線が小恋にいった。

「えゝ嫌だよ！人工呼吸なんかできないよぉ」

小恋はすごい勢いで拒絶した。

「小恋ちゃん。その拒絶ップリはいくらなんでもひどすぎると思
よ・・・」

茜が苦笑いしながら言った。

「仕方ない。文句なしのジャンケンで決めるか」

義之が自信満々に言い、皆が同意した。

「ジャーンケーン・・・ポン!!」

「本当に俺がやるのか？」

ジャンケンの結果、負けたのは言い出しっぺの義之だった。

「男に2言はないはずでしょ？」

杏がそう言い、皆が興味深く、義之と渉を見た。

「クソー! こうなったらやけくそだ!」

義之は即座に、気道確保をし、人工呼吸をした。

その瞬間渉は目を覚ました。

「義之・・・」

渉は義之の目をみつめた。

「これは仕方なくだな・・・」

義之は渉から目をそらして言った。

「俺はお前さえよけりゃいいんだぞ!」

渉はそう言っ、目をつぶった。

ドカ! バキ! ブシュ! バコ! バオゴキ!

「はあはあ・・・一生目開けんな!」

渉は再起不能になった

「あゝあ、いい所だったのに」

「結構、ウブなボーイズラブもいいかも」

茜と杏が義之をからかいながら言った。

「うっせーなあ! こいつなんかほっといてさっさと行くぞ!」

義之はそう言い、先先、進んでいった。

「よく見たら、ひでえ有様だなこりゃ」

倒れてる渉の横に一人の男が歩み寄った。

そして、渉の口に何かの液体の飲みました。

「これで二つ目の仕事完了だ。あとは・・・」

男はそう呟きメモを広げた。

「先回りして、帝国の鎧を置いとくだど?! 剣と一緒に渡せばよかったんじゃないのか? さくらの奴、回りくどいことしやがって」

男はそう言い、急いで鈍一らの後を追った。

「ん? こんなドア、この前来た時はなかったはず」

杉並が言った。

目の前には白い鉄のドアがあった。

「おい! 鍵はかかってないみたいだ」

義之がドアノブを回して言った。

「ねえ、やめようよ。この先絶対やばいって!」

小恋が言った。

「ここまで来たんだ。今更戻るなんてできねえよ! な?」

義之はそう言い、杉並に振った。

「当たり前だ! さあ、行くぞ同士達よ!」

杉並はそう言い、義之と共にそのドアの中に入った。

「俺がいるから心配するなって」

鈍一は小恋達にそう言い、義之達に続きドアの中に入った。

「やっぱ無理・・・」

鈍一がある生き物を見上げながら言った。

「シャー・・・」

ベヒーモス 人造魔物

レベル50

HP 1200 MP 0

攻撃力 800 防御力 390

魔力 0 魔防 0

精神力 190 敏捷性 400

ドアの向こうは研究所らしき部屋だった。

そして、行く手を阻もうと、5メートル程ある紫の魔物が2匹いた。

「1匹ならなんとかなるかもしれないけど、2体は無理だろ」

鈍一はそう呟き、剣を構えた。

「鈍一！また杉並が」

義之が言った。

周りを見渡すと杉並の姿は消えていた。

「想定内だ！動じるな！お前は小恋達を守ってやれ」

そう言って、義之を後ろに下がらせた。

その時、後ろからものすごい勢いで何かが鈍一の横をかすめた。

「ななな？隕石か？」

異様な物体がさっき来た道から飛んできて、ベヒーモスの頭に直撃した。

鈍一は恐る恐る、ベヒーモスの頭にめり込んでる物体を覗き込んだ。

「これは！さくらの家に置いてきた鎧」

飛んできた物体は帝国の鎧だった。

「ほとんど原型とどめてないぞ。でも今ので1匹死んでくれたしな！」

鈍一は残り1匹のベヒーモスに向かって剣を構えた。

「3つ目完了。最後の仕事は・・・あいつらがここから逃げ出すまで待機か。あいつと戦う前にちよっと休んどくか」

そう言って男は姿を消した。

洞窟での戦い――1（後書き）

朝倉「まだ強くなれるのか？俺？」

作者「さあゝねえゝ」

朝倉「それに、あの謎の男はだれ？」

作者「いつかは明らかにするけど、5話くらい先かなw」

朝倉「そんな先なのか！！」

作者「うん。あ、でもあの謎の男が最後に言ってた『あいつ』は次回出てくるよ」

朝倉「はあゝ、まだまだ先は長いってことか・・・」

作者「じゃ、次回もお楽しみにゝ」

洞窟での戦い――2

鈍一はベヒーモスに切りかかった。

「クソ！なんて厚い皮だ。かすり傷一つつかねえとは・・・」
そう、眩き一旦間合いをとった。

「ふっふっふ、俺の力が必要か？」

どこかで聞いたことのある声が、背後から聞こえた。

「渉！お前も義之と一緒にいろ！」

鈍一が渉に忠告した。

「ちっちゃち、今の俺を、前までの俺と一緒にしないでほしいなあ。
いくぜ！」

渉はそう言い、自信満々にベヒーモスに突撃した。

「早い！これはひよつとするとひよつとするか・・・」

鈍一は一瞬、渉の動きに感心したが・・・

「ぐはっ！」

渉は勢い余ってベヒーモスにぶつかり、1000のダメージ。再び戦闘不能になった

ベヒーモスに200のダメージ

「渉君、哀れだね」

「バカ」

「じっとしとけばいいのに」

雪月花の3人が渉を見て言った。

「でも渉のおかげでなんとかかなりそうだ！あいつには打撃が有効みたいだな」

鈍一は辺りを見渡し、殴れるものがないか探した。

「義之！お前が持ってるそれって？」

「はあ、はあ、何とか倒せたか」

鈍一は安心しきって、しりもちをついた。

「ねえ、早く帰ろうよ」

「あともうちよつとだけ」

むこうはむこうで、小恋と茜がこのまま進むか、帰るかでもめていた。

「月島！今度こそお前は俺が守る！」

いつの間にか復活していた渉が後ろから小恋の肩に手を乗せた。

「いや！」

「ぐほおわ！」

見事に小恋の肘打ちが渉の腹に決まり、渉はうずくまった。

「もうちょつと進んで、それでも危なかったら帰ろ」

義之が小恋に言った。

「うーん・・・もうちょつとだけだからね」

小恋がしぶしぶ了承した。

「義之と俺の扱い違うくねえか？」

渉が未だにうずくまりながら、ツツコミを入れたが、誰も聞いておらず、みんなは先に進んでいた。

「それにしても、剣といい、鎧といい、いったい誰が・・・」

見張りのベヒーモスを倒し、そこから歩くこと5分、奇妙な部屋に出てきた。

その部屋にはびっしりと機械で埋め尽くされており、中央に縦長のカプセルが立っていた。

カプセルの中には緑の液体が入っており、その中にひとりの銀髪のショートヘアーの少女がうずくまって、浮いていた。

「この子って人間だよね？」

小恋がカプセルに手を置いて言った。

「みたいだな・・・」

義之が呆然とその子を見ながら言った。

「どうやら俺たちは足を踏み入れてはいけない場所に来てしまったみたいだ」

杉並が冷静に言った。

「帰った方がよさそう」

杏がそう言い、みんなが回れ右をし、その時！

「お前らよくも俺を置いて行きやがっ・・・」

渉がこちらに走ってきて、その部屋にあったコードに引っかかりつまづいた

ジャバーーーーー

そのコードはカプセルに続いていたもので、渉がつまづいたせいで、コードが切れ、何かのロックが解除されて緑の液体が勢いよく漏れて、カプセルが破損した。

その破損したカプセルから当然緑の液体と一緒に、中に入っていた少女もでてきた。

「どうしよ・・・」

茜が困った顔で言った。

「警告音などが鳴らなかったことが、吉と出るか凶と出るか・・・」
杉並が真面目な顔で言った。

「ミ」

少女はそう言って起き上がった。

「赤い瞳だ・・・」

皆はあまり気にはいなかったが、鈍一だけが不吉に感じた。

「みー？この子しゃべれないのかな？」

小恋が言った。

「俺に任せとけ！」

事態を悪化させた張本人渉が、そう言いその少女に近づいた。

「君の名前は？ミーちゃんって言うのかな？」

渉は子供に話しかけるような言い方で言った。

「ミーーーーーーー」

「なっ・・・」

「キャーーーーー」

「っう！」

その少女が突然大きな声を上げた瞬間、竜巻が発生し、全員吹き飛ばされた。

「ぐはっ・・・はあはあ、おい！義之！杉並！大丈夫か？」

かろうじて鈍一と杉並だけ意識が残っていたが、他のみんなは危険な状態だった

「はあはあ、なんなんだよあいつ・・・」

鈍一はその少女に向かってステータスチェッカーを向けた。

天枷美季 人造人間

第1段階

HP	***	MP	***
攻撃力	2300	防御力	2200
魔力	4320	魔防	4300
精神力	9999	敏捷性	1500

「天枷って・・・まさか！」

鈍一がステータスチェッカーに気をとられていると

「ミーーーーー」

どこからか無数の短剣が鈍一に襲い掛かってきた。

鈍一はなす術なく視線を逸らし目をつぶった。

カンカンカン

つと短剣を弾く音が聞こえた。

「え？真夜さんが何故ココに？」

そこには大人姿の真夜が日本刀で、全ての短剣を叩き落して助けてくれた。

「あのジジイから全て聞いた。おぬしはそいつらを連れてここから

出る！」

「俺と杉並だけで4人も運べるはず……」

鈍一がそういいかけた時

「うわゝ小恋もみんなも大丈夫？」

「杉並、あんたが苦戦してるなんて珍しいわね……」

ななかとまゆきが走ってきた。

「早く行け！外で金髪のツインテールが待っておる！」

真夜はそう言い、美季に突撃した。

「鈍一くん早く早く！」

ななかにせかされ、小恋を背負いやむ終えなく、真夜を置いて逃げることにした。

「お兄ちゃん大丈夫！？」

入り口にはさくらと、未来の純一が待っていた。

「さくら、皆は無事か？」

純一が言った。

「うん、なんとか間に合ったみたい」

さくらはそういい、みんなの治療に専念した。

「なあ、お前は未来の俺なんだろ？あいつは誰なんだ？」

鈍一が純一に言った。

「それはまだ話せん。お前は今から元の世界に戻るんだ」

「な！真夜さんが、まだ中で戦ってるんだぞ！」

鈍一は年寄りとか関係なく胸倉をつかんだ。

「最初に言った言葉を覚えているか？あの時間帯は君と私をあわせて5人いたんだ」

純一がそう言い、鈍一は純一の胸倉から手を離した。

「あの子に対等に戦えるようになってから、また戻ってきなさい」

そう言われ、鈍一は真夜を残し、一旦元の世界に戻ることにした。

洞窟での戦い――2（後書き）

作者「ここで未来編1章は終了」

朝倉「何章まであるんだよ！」

作者「4章！だからあと3回未来に行くってことだね」

朝倉「ネタバレじゃないのか？っで天枷美季って誰？」

作者「オリジナル」

天枷^{あまかせ} 美季^{みき}

身長 156cm

特徴 背中まで伸びた銀髪、美春と同様、ヘアバンドをしている

今現在の服はバトルスーツを着ている

名前の由来は美春↓美夏↓美秋↓美冬は春夏秋冬から取られているから、季節の季をとって美季

朝倉「あれ？これだけ？」

作者「未来編2章、3章でじわじわと明らかにする予定だから、ここではまだ全て公開しない」

朝倉「絶対美春と美夏とかと関係あるだろ？あとバナナも？」

作者「それは今後のお楽しみ！さあ、今回は『魔界の者と中立者と反乱軍のリーダーとの接触』です」

朝倉「タイトル長くないか？」

作者「あくまで仮だし」

朝倉「いいかげんだな」

作者「次回もお楽しみに」

現代編：魔王再び

「うわ~~~~」

ドシューーン

「痛てて、ちゃんと戻してくれよ。変な戻し方しやがって……」
純一が飛ばされたのは、何処かの森の上空だった。

時間帯は月が真上にあるから、深夜と予想される。

「ここは一応帝国領の森だな。よかった、歩いて帰れる距離だ」

純一はそう呟き、帝都のほうへ歩き出した。

しばらく歩いていると、何処から話し声が聞こえてきた。

純一は興味本意で、その話し声が聞こえる方へ、静かに近寄った。

「俺様はいつまでこんな姿でいればいいんだ！」

「オレたちに言わないでほしいッス」

話し声をする所には、火がたかれていて明るかった。

「このままこんな姿じゃいつまでたっても、魔界に帰れんではないか」

「だから今、フロンさんを探してるんじゃないッスっか！」

「ペンギンが喋ってる~~~~」

そこにはかわいいペンギンと目つきが悪いペンギンがいた。

「誰だ！」

「やべ！見つかった」

純一は急いで逃げようとしたけど、振り返った瞬間、目つきが悪いペンギンが目の前に立っていた。

「貴様はあのときの……！あの時はよくも毒殺してくれたな！目つきが悪いペンギンが言った。

「はあ??俺ペンギンなんか毒殺した覚えないぞ。しかも生きてるじゃねえか」

純一がそう言うと、

「このかたは、元魔王ラハール様ッス！そんでもって、オレはラハ

ール様に虐げられているプリニーツス」

かわいいペンギンがテトテトと近づいてきて言った。

「ラハールってあの・・・」

そいつは純一が初めてこの世界にきたときに戦い、音夢と由夢のタッグ弁当でなんとか撃退したラハールだった。

ラハール プリニー

レベル	9999		
HP	9800	MP	9999
攻撃力	9400	防御力	9300
魔力	8620	魔防	9000
精神力	8880	敏捷性	3400

未来の杉並から借りっぱなしになっていた、ステータスチェッカーを使った。

「いや、お前が勝手に、俺の弁当食っただけだし」

純一は普通に言った。

「言い訳とは見苦しいぞ！おかげでこんな姿になってしまい、本来の力が発揮できなくなってしまったではないか」

「逆ギレですか？それに充分に強いと思うのですが？」

「問答無用だ！」

ラハールはそう言い、剣を振り上げ、純一に襲い掛かった。

「いつでもOKッス」

「っな！！」

急に後ろにいたプリニーに抑え込まれて、純一は身動きがとれなくなってしまうた。

「卑怯だぞ！」

「その誉め言葉ありがたくもらっておく」

ラハールはそう言い、剣を振り下げた。

カン！

一人男がラハールの攻撃を剣で止めた。

「ミスミス同志をこんな所で死なすわけにはいかん」

「杉並！」

杉並 特級特殊剣士

レベル5800

HP	14000	MP	2400
攻撃力	8500	防御力	7300
魔力	5200	魔防	4400
精神力	5900	敏捷性	2400

「貴様か！覚えておるぞ。あの時、ボロボロにしてやったのを忘れたか？」

ラハールが言った。

「あの時の俺は魔道士だったからな！でも今は違う！この双蛇剣の錆にしてくれる！」

杉並はそう言い、両手の短剣を見せつけた。

「剣の錆になるのは貴様ではないのか？」

そう言ってラハールは杉並に切りかかった。

2人は10分間、攻防が続いたが、杉並のスタミナ切れで、押され始めてきた。

「俺にはレベルが違いすぎる・・・どうすれば・・・」

純一がそう呟くと、

「ジャストモーメント！同志！我輩の発明品を使うんだ！」

「大志！！」

草むらから急に大志が現れ、リーダー銃を渡された。

「これを相手に向かって放ってみろ」

純一は大志に言われるがまま、ラハールに銃を向けた。

ビュウ~~~~~ン

引き金を引くと、間の抜けた音と同時に、純一とラハールの身体

が光りだした。

「おお！成功だ！」

大志が喜びながらそう言い、杉並と手を叩いた。

「なんだこれ・・・！」

「貴様！何をした！」

一人の人物が言った

その人物は紫の髪の毛で、純一と同じ背の高さで短パンに赤いマントを羽織っていた。

「何って合体だ」

大志が普通に言った。

「合体ってなんだよ！」

「なんで人間と合体などせんといかんのだ！」

その男は大志に八つ当たりした。

「過ぎたことだ！仕方ない」

その一言で、全て片付けられてしまった。

アサクラハール 人間？

レベル 9 9 9 9

HP ＊＊＊＊ MP 50

攻撃力 6700 防御力 6600

魔力 9500 魔防 8800

精神力 7700 敏捷性 1400

「名前ださ！」

「MPが50とはなんだ！魔王球一発使ったら終わりではないのか！」

アサクラハールが言った。

「その前に名前を改名を所望する！」

「ラハールでいいだろう」

「おかしいだろそれ！」

「第一、レベル48のお前がここまで強くなれたんだぞ！むしろ感謝しろ」

一応、純一とラハールの言い合いなのだが、今は合体しているの
で、他所から見れば変人と思われるだろう。

つまり大声で独り言を言ってるように見えるだけだ。

「じゃあ間を取って、クラハでどうだ？」

「仕方ない。それで我慢してやる！」

なんとか話がまとまり、その場は落ち着いた。

「杉並、九品仏、例の奴はそいつか？」

謎の双剣士が奥の暗闇から現れた。

朝霧 涼喜 特級双剣士

レベル	9900		
HP	9100	MP	9200
攻撃力	***	防御力	8300
魔力	***	魔防	9800
精神力	8800	敏捷性	3000

「涼喜か？ああ、こいつが言ってた朝倉だ」

杉並がその双剣士に言った。

「おまえが・・・向こうに小屋がある。そこで話そう」

涼喜はそう言い、一人で奥のほうへ歩き出した。

「あいつ誰だ？」

「俺たちのリーダーだ」

杉並はそう言い、涼喜の後を追いついて行った。

「改めて、俺の名は朝霧涼喜だ。中立者として、この世界の未来を見届けるものだ」

涼喜が座布団の上に座って言った。

「っで、その中立者が俺に何の用だ？」

クラハが涼喜と向かい合わせに座り、めんどくさそうに言った。

「話せば長くなるんだが・・・」

涼喜がそう言い、話を始めた。

「世界の流れと言うものは、一種の川みたいなものだ。みんな流されるままに動くのが当たり前なんだが、

それに逆らっている奴らが増えてきているんだ」

「魔界の奴らと反乱軍のことだ」

大志が付け足して言った。

「魔界って魔王が不在なのにそんなことしていいのか？」

「何を言っておる？魔王はいるぞ！魔王ゼノンがな」

大志がそう答えた。クラハの中のラハールは複雑な心境だった。

「そのまま、王国と帝国の奴等に反乱軍を鎮圧してもらえば、それでいいんだが、今の帝国は圧倒的に押されている」

「それに王国は昨日、反乱軍に攻め落とされてしまった」

杉並が付け足していった。

「っな！王国が落ちたって本当か？」

クラハの中にいる純一が言った。

「ああ、将軍クラスのはほとんどは帝国に保護して貰っていると聞くな」

杉並が言った。

「反乱軍って、そこまででかくなってるのか・・・」

クラハは驚きを隠せなかった。

「最初はたかが300だった兵が今では100万だからな。大したリーダーだよ」

涼喜が微かに笑いながら言った。

「それと俺、何が関係あるんだ？」

クラハが言った。

「お前芳乃の居場所知ってるんだろ？教えてくれないか？場合によ

つたら、お前らに味方するかもしれん」

涼喜が言った。

「王国が落ちたんだったら、多分さくらの帝都にいらっしゃると思う！ここから30分で着く。案内するぜ」

クラハがそう言い立ち上がった。

「朝倉！待て」

外に出ようとするクラハを、杉並が止めた。

「どうやら招かざる客が来たようだな」

涼喜がそう言い、双剣に手をかけた。

「反乱軍だな。どうやら囲まれている」

大志が辺りを見渡し、2本の刀を構えた。

「敵はざっと20万！たかが4人にここまで兵を動かすとはな」

杉並がそう言い、双蛇剣を構えた瞬間、

「うおーーーーー！！」

20万の兵が一気に小屋になだれ込んできた

「戦闘に関しては俺様に任せとけよ！」

クラハの中のラハールがそう言い、赤いマントから大剣を取り出した

「ああ、戦闘に関してはお前に全て任せるぜ」

現代編：魔王再び（後書き）

作者「やっぱり反乱軍のリーダーは出せなかったか」

クラハ「俺はいつまでこの姿なんだ？」

作者「フロンと出会うまで！その前に未来に行ってもらうけどねええ」

クラハ「やることいっぱいだな」

作者「だねー！さあ、次回は反乱軍の将、全員公開！」

クラハ「次回で全員出すのか？」

作者「反乱軍もそこまで本気ってことだよ」

クラハ「俺たちやられるんじゃないのか？」

作者「それは次回のお楽しみ」

クラハ「まあ、今の俺は負ける気しないからいいけど」

VS反乱軍

【刹那水流剣】

涼喜が小屋と兵士をまとめて、広範囲の攻撃を放った。

「クラハ！大志！杉並！こっちだ」

涼喜が先頭にたち、東に向かった。

「おい！帝都はこっちだぞ」

クラハが西に指を指して言った。

「そっちにはバカでかい魔力の持ち主が何人もいる。多分待ち伏せされてる」

涼喜はそう言い、ドンドンと東の方へ杉並達と走っていった。

「ってラハール！さっさと逃げるぞ」

クラハの中の純一が言った。

「俺様は逃げるのが大嫌いなんだ」

そう言って、赤いマントを羽に換え、空高く飛んだ。

「一気に片付けてやる」

【魔王球】

ズドーーーーン

クラハは真下に魔王球を放ち、森の真ん中に半径2キロ近くのクレーターができた。

「はーっはっはっは！このラハール様にかかればあんな雑魚の10万匹や20万匹・・・」

クラハの中のラハールが高笑いしていた。

「同志！我輩たちも殺す気か？」

「涼喜がシールドを張ってくれてなかったら、俺たちも死ぬと事だったぞ」

大志と杉並が戻ってきた。

「よ・・・よくも仲間を・・・！」

残った兵士が威勢良く剣を向けてきた。ざっと100人程度だ。

「ただの数が多いだけのお前らに、俺らを倒せると思うのか？」

涼喜が兵士達を挑発しながら言った。

「雑魚には用はない！さっさとお前の所の大將を出せ！雑魚以下のクズが」

クラハの中のラハールが言った。

「言わせておけば！俺たちが本気を出せばお前らなど！」

兵士100人はそう叫び、クラハ達に飛び込んできた。

クラハ達は剣を構えた瞬間

「お前らは引っ込んでろ！」

兵士の後ろから男の声がした。

「リーダー！やらしてください！このままじゃ俺たちのメンツが・・・」

「メンツもクソもないだろ！雑魚と言われ取り乱す奴が雑魚なんだ」男はそう言い、やっと姿を現した。

その男は腰まで伸びたサラサラな黒髪に漆黒の瞳をしていて、黒いコートを羽織っていた。

「雑魚がどっちなのかは結果が決める！俺がいるんだ！お前らはそこでおとなしくしてろ」

男はそう言い、涼喜の目の前で立ち止まった。

「俺らが雑魚と言いたいのか？」

杉並がその男に言った。

「そう聞こえたか？それじゃあ謝るよ」

その男は不敵に笑いながら言った。

「貴様！俺らを侮辱しておるのか！」

「やめろ！」

クラハがその男に攻撃を仕掛けようとしたが、涼喜に止められた。「それで反乱軍が俺たちに何の用だ？」

「紹介が遅れたな。俺は反乱軍リーダー陽河悠夜。お前を迎えに来た」

陽河 悠夜 闇を操る者

レベル	9900
HP	8600
MP	9200
攻撃力	***
防御力	7900
魔力	9999
魔防	9400
精神力	***
敏捷性	2500

「迎えに来た？ ということだ？」

涼喜が悠夜に言った。

「お前は、この反乱軍に欠かせない人材だ。おとなしく俺の軍に下れば、残りの3人は解放してやろう」

「断ると言えば？」

涼喜がそう言った瞬間、周りに強大な力を持つものが6人現れた。

泉 こなた オタク

レベル	9700
HP	7700
MP	***
攻撃力	6800
防御力	8800
魔力	8800
魔防	7900
精神力	6700
敏捷性	2400

水色の超ロングヘアで頭のとっぺんにアホ毛がある。

緑色の瞳に左目の左下に泣きぼくろが特徴的で、赤い制服を着ていた。

トレインIIハートネット 掃除屋

レベル	9840
HP	9000
MP	4400
攻撃力	6000
防御力	9400

魔力	7100	魔防	6800
精神力	8000	敏捷性	3900

茶色の髪の毛で猫のような黄金の目で、コートからズボンまで真っ黒だ。

シャナ フレームヘイズ

レベル	9900		
HP	9400	MP	7800
攻撃力	****	防御力	5600
魔力	8450	魔防	5500
精神力	7700	敏捷性	3000

赤髪のロングヘアで赤い瞳、黒い学生服を着ていた。

無限 謎の男

レベル	9999		
HP	****	MP	****
攻撃力	****	防御力	8000
魔力	****	魔防	9100
精神力	8000	敏捷性	2600

血のように真っ赤な長髪、顔を半分に分けた骸骨の仮面で覆い、仮面のない半分の素顔の瞳は金色に輝き、顔は若い美青年だ。体は真っ赤な布に覆われてた。

昭島 全てを治癒出来る者

レベル	8900		
HP	4400	MP	9000

攻撃力	5400	防御力	7800
魔力	8000	魔防	8700
精神力	8100	敏捷性	2000

朝倉音夢 特級看護士

レベル	8200
HP	3900
MP	8200
攻撃力	3800
防御力	8300
魔力	7100
魔防	8100
精神力	7900
敏捷性	1900

「音夢！お前なんで反乱軍にいるんだよ！」

クラハが音夢に言った。

「知り合いかい？」

昭島が手を後ろから音夢の肩に置いて言った。

「いいえ、あんな人会ったこともありません」

音夢がきっぱりと言った。

「昭島先生も俺がわからないのかよ？」

「存じあげませんね」

今のクラハは純一とは、まったくの別人の姿をしているし、声も違うからわからなくて当然だ。

「やれやれ、またこんなにも死人を出してしまっ……」

昭島はそう言い

【完全蘇生】

そう言った瞬間、跡形もなく吹き飛んだはずの19万近くの兵士が蘇った。

「マジかよ……」

杉並も大志も現実離れしすぎた光景に目を疑った。

「そういうことか」

涼喜が勝手に納得した。

「死人が一人もいなかったら、そりゃ兵士は増える一方だな」

「そういうことだ。お前には俺たちに勝つことも、ここから逃げることもできない」

悠夜はそう言い、黒い竜を呼び出した。

「さあ、答えろ涼喜！お前は俺の反乱軍に入るか？」

涼喜がここで、反乱軍に入れば、残りの3人は見逃してもらえ。でも断れば4人とも抹殺、きたないやりかただ。

そして涼喜が出した答えは・・・

「お前らと一緒に流れに逆らうことはできない！来い！ 第壹相、スルガロス！」

涼喜がそう叫んだ瞬間、周りの兵士は吹き飛ばされて、背中に赤い光を帯びた羽が生えた。

「全員抹殺希望か！逃がすなよ」

悠夜は6人の将に命令した。

「刹那水流破、上級！」

【永劫爆流波】

2つの赤い衝撃波が涼喜の周りに広がり、7人の反乱軍の目を盗んでその場を去った。

「ここは一旦バラバラになろう」

涼喜がそう提案を出した。

「その方がいいな」

「じゃあ生きてまた会おう」

大志と杉並はそう言い、左右に別れた。

「芳乃の所の案内を頼んどいてなんだが、お前も一旦逃げろ」
「逃げろって帝都の方面は奴らがいるのにどうやって・・・」

クラハと涼喜が喋りながら、森の中を走っていると

【ナイトメアクリムゾン】

「危ない！」

涼喜がクラハを引っ張り、悠夜の攻撃を退けた。

「余所見をされていていいのか？」

【永遠】

闇のエネルギー砲がクラハと涼喜に向かって飛んできた。

【ハイデイスペラード】

涼喜の魔法で無限の魔法を打ち消した。

「言ったはずだ。ここから逃げることもできんな」

悠夜がクラハの前に立って言った。

「さあ、共に逝こうではないか。闇の世界に」

悠夜の隣にいた無限が言った。

「つち、お前は早く逃げろ！この2人は俺がなんとかする」

涼喜はクラハも前に立って逃がそうとした。

「あの2人に敵うはず・・・」

「後は頼んだ！未来の流れを戻す者」

涼喜はそう言って、クラハを後方に吹き飛ばした。

「ほぉ仲間を庇い、自分が囷になるとか泣かせるじゃねえか！でも俺らの狙いはお前なんだよ！」

悠夜はそう言い、黒蘭を涼喜に襲わせた。

ドン

吹き飛ばされたクラハは見えない壁にぶつかった。

「いって・・・ってここから森を抜けるじゃねえか」

クラハの中の朝倉がそう言い、出ようとする

「だめだ出られない」

クラハの中のラハールが言った。

「誰かがこの森に結界を張ってやがる！結界を張った本人をたおさ

なければ、出ることも入ることも不可能だろう」

ラハールがそう言った。

「結界を張った本人って、あの7人の誰かだろ？倒すとか無理だろ？他に方法はないのか？」

純一が言った。

「ないことはない。時空移動で時間遡行して、結界の張られてない時にいけばいい」

「時空移動ってまさか？」

「未来や過去に行くことだ！そんなことも知らんのか？」

「いや、知ってるけど・・・そんなことできるのか？」

「難しいことではない！じゃあ今から1週間後にでも飛ぶか」

ラハールがそう言い、魔力を貯めた。

「待ってくれ！行ってほしい時がある」

「いつだ？」

「50年後だ」

「50年後お？また物好きなの・・・行けないことはないが」

「頼む」

「しょうがねえなあ」

クラハの中の純一とラハールはこうして、また50年後に行くのであった

・
・
ある人物を助けに、ある人物を迎えに、ある人物を倒しに・

VS反乱軍（後書き）

作者「さてさて、次回からまた未来編！」

クラハ「涼喜たちの戦いは？」

作者「スルーするつもりだけど、作者の気まぐれで外伝としてだすけどね」

クラハ「絶対出した方がいいだろ？悠夜、杉並、大志、涼喜、無限、って異常キャラが5人もいるんだし」

作者「異常キャラってネタバレだから言うな！では反乱軍のメンバーと中立者の紹介」

中立者

朝霧 涼喜 朝倉由那さんのオリキャラです

「The Souleater／魂ヲ喰ライシ者」の主人公です。そちらの作品も読んでおくとDCQSSIも2割り増しでおもしろくなります。

反乱軍リーダー

陽河悠夜 RYOさんのオリキャラです！

魔女狩りでも活躍中ですが、原作「ツインククエストヒーローズ？」の主人公でもありそちらでも更に活躍中です。

反乱軍副リーダー

泉 こなた 「らき☆すた」の主人公です！

反乱軍戦闘隊長

無限 ヒュンケルさんのオリキャラです！

「想いと運命の狭間」のサブキャラとして登場しています。

反乱軍戦闘員

シャナ 「灼眼のシャナ」の主人公です！

トレインⅡハートネット 「ブラックキャット」の主人公です！

昭島 音夢が通っていた看護学校の先生

朝倉音夢 純一の妹（これは紹介いらさないかw

作者「以上！これで反乱軍の將軍全員です！」

クラハ「光喜とリリムは？」

作者「帝国に入ったじゃん」

クラハ「なんで反乱軍にいないんだ？」

作者「それもいつか明らかになるよ」

クラハ「謎を作るの好きだな」

作者「むふふwそれじゃあ次回もお楽しみに」

外伝… 3人の戦い

大志サイド

森のどこかに一人の男が10万の兵と2人の将に囲まれていた。

「何故、我輩だけこんなにもねられるのだ！」

大志が両手に2本の刀を構えながら言った。

「そりゃあ、体中にそんなに蛍光灯巻きつけてたら、嫌でも目立つよ」

こなたが笑いながら言った。

「こいつの相手は私がやる！あんたは他に行きなさい」

「嫌々、シャナタンが他に行けばいいよ。ここは私に任しいから」

シャナとこなたがどっちが大志の相手をするかで、もめている。

「これはチャンスだ！さらばだ！！！」

大志はそう言い、この場から去ろうとした瞬間ズツこけた。

「な！我輩の足が石に・・・」

大志の足から膝までが石化しており、身動きが取れない状態だった。

「この話が終わったら、解いてあげるから、まってて」

こなたがそう言い、またシャナと口論をしていた。

「ふっふっふ、足を固まらせたぐらいで、我輩が黙っておると思うのか？！」

大志はそう言い、二つの刀を足がわりにして、石化した足を引きづりながら、シャナ達に向かっていった。

「ぐはっ！！」

両手が塞がっていた大志は防御もできず、シャナに蹴り飛ばされた。

「なんかこんなアホ相手に真面目に戦うのがアホらしくなってきた

わ

「右に同じ！どっちが仕留めるかは早いもの勝ちにしようか」

「そうね！」

二人はそう言い、刀を構えた。

「笑止！人を見かけで判断する輩には、この我輩を倒すことはできませんぞ！」

大志はそう叫び、体勢を立て直した。既に足の石化は解けている。「見かけで判断してたら、あれだけ言い合いになってないよ」

【地流岩礁山】

こなたがそう言い、剣を地面を突き刺した瞬間、大地に衝撃が走り、大志を空中に浮かした。

空中に浮かされた大志を追撃するかのようになり、シャナが大志に切りかかった。

キン

大志は右手に握っている刀だけでシャナの攻撃を受け止め、後方から来たこなたの攻撃を左手握っている刀で受け止めた。

「ふはははは！ぬるい！ぬるいぞ！全ての攻撃が生ぬるい！！」

大志は両手の剣を瞬時に逆手に持ち変え、こなたとシャナを押し返した。

【身体強化・鬼人】

大志の足が地面に着いた瞬間、ものすごい風が巻き起こり、爆発的に全ての能力があがった。

「やっぱりそう簡単にボスを倒せるはずないか」

「うそ・・・人間がこんな力だせるなんて・・・」

大志はこなたはどうかかわからないが、シャナがうろたえているのを確認すると、二人に背を向け走っていった。

「あんなに間合い取って、何するつもり？」

二人は警戒姿勢をとり、周りを囲んでいた兵士も、引き腰になった。

「ん？あいつ戻ってこんぞ・・・」

そのまま走り去った大志は一向に戻ってくる気配はなかった。

「ハメられた！あの技は一瞬だけ力を爆発的に上げる脅し技よ！」
シャナがそう言い、大志が逃げた方向に走っていった。

「これこそ、ゲームの醍醐味だね」

こなたも楽しそうにシャナのあとについて行き、大志のあとを追った。

杉並サイド

「朝倉妹！あのなかに朝倉がいたのを気づいていなかったのか？」

杉並が音夢に言った。

「あの中に兄さんが？ありえませんか！杉並君にしては下手な心理攻撃ですね」

音夢はそう言い、数本の注射器を投げてきた。

カンカンカン

杉並はいとも簡単に、自慢の双蛇剣で注射器を弾いた。

「おもしろい剣だね」

昭島が言った。

「俺だけの武器だからな」

双蛇剣とは、分割できる金属の刃を内部から、ワイヤーで通している剣、

ワイヤーを伸ばせばムチとしても扱えるし、短くして剣としても使える。

しかも二つの剣の柄同士を縦に組み、弓としても扱える3役1品の優れものなのだ。

「でも武器だけに頼っていると、痛い目に合いますよ」

音夢がそう言い

【みんな！がんばって！】

「おおーーーーー」

音夢が兵達に言うのと、10万の兵が勢いづいて杉並に襲い掛かってきた。

「さすがは朝倉妹だ。男の使い方を熟知しているな」

杉並はそう言い、双蛇剣をムチのようにし、兵を一瞬でなぎ払った。

【ドーピング強化】

倒れた兵に昭島は一瞬で注射器を投げた。

すると、倒れた兵は凶暴化し、全ての筋肉が2倍以上に膨れ上がっていた。

「ここまででかかったら、なぎ払えんな」

杉並はそう判断し、兵を無視して、昭島に突っ込んだ。

「先生に刃物を向けるとは感心しませんね」

昭島は手をポケットに入れながら、防御体勢をとろうとしなかった。

カン

横から黒づくめの男が、銃で杉並の攻撃を止めた。

「トレイン君ありがとう」

昭島はそういい残し、去ろうとした。

「逃げるのか？」

「君の相手はそこにいるだろ？さあ、音夢君、ここは退かせてもらおう」

「はい」

昭島はそう言い、音夢を連れてどこかに去っていった。

「仕方がないな！一気に決めさせてもらうか」

杉並はそう言い、剣を構えようとした瞬間、後ろから凶暴化した兵が杉並を襲った。

「ぐはっ！」

杉並はその場に膝を着いた。

「俺としたことが不意打ちをくらうとは……」

杉並がそう呟き、顔を上げた瞬間、

「ゲームオーバーだ」

トレインに杉並の頭に銃口を向けられていた。

涼喜ルート

【烈火魔双刃】

5度の斬撃が無限を襲う。体に傷がつくがすぐに消えてしまった。
「ucci、こいつは斬撃はくらわねえのか？」

涼喜がそう呟き、無限を高速ですり抜け、悠夜に切りかかった。

「何をそんなに急いでるんだ？もっと楽しもうぜ！来い！黒蘭！！」
悠夜は涼喜が至近距離に入った瞬間黒蘭を呼び出し、涼喜を吸収しようとした。

【エクスティスperl】

涼喜は反射神経でそれを、なんとかかわした。

「流石だな。でもそこまでだな」

悠夜がそういった瞬間、涼喜の後ろにもものすごい魔力を感じた。

【滅却】

無限がそう言うのと、手に闇の塊が生み出され、それが消えたと思った瞬間、

涼喜の目の前に現れて爆発を引き起こした。

「ぐわぁー」

涼喜は気づくのが遅く、打ち消せず、まともにに食らってしまった。
た。

「さっさと連れて帰るか。敵に回すと厄介だから、俺の手元に置いておくぞ」

悠夜がそう呟き、涼喜を持ち上げようとした瞬間、

ズシャ

「ucci、まだそんな体力が残っていたのか」

涼喜は双剣で悠夜の右腕を切り落とした。

しかし悠夜は黒蘭で、周りの木々を枯らして、右腕を再生させた。
「来い！第四相・・・マルニロス！」

すると、涼喜の体の傷は癒えていき、背中から純白の翼が生える。
「回復できるとは、厄介だな」

「それは、お前ら二人もそうだろう！」

涼喜はそう言い、再び双剣を構えた。

「これは、意識不明まで追い込まないといけないな」
無限はそう言い、悠夜とアイコンタクトをとった。

「この技で死ぬることを光栄に思うがいい」

「まあ、お前なら死なねえと思うけどな」

二人はそういい、涼喜と間合いをとった。

【破天】

無限がそう言うと、闇の裂け目が現われ、

「いっけー！黒蘭！！」

その裂け目に黒蘭が昇り入っていった。

【合体技・邪黒蘭破天】

闇の裂け目から、無数の雷化した黒蘭が涼喜を襲った。

【ハイディスペラード】

白い光を放つ衝撃波が、涼喜から放たれた。

そして、その光は雷化した黒蘭にぶつかり、打ち消していくがキリがなかった。

「クックック、この技は標的が倒れるまで、半永久的に襲うのだ」

無限が笑いながら言った。

「くそ・・・こうなったら、一か八かで・・・」

涼喜はそう言い、魔法を解き、無限と悠夜に切りかかった

「最後の悪あがきか？おもしろい、やってみろよ！」

悠夜はその場にずっと立ち尽くしていた。

「ただ、気が狂っただけではないのか？」

無限もそう言い、その場に立ち尽くした。

「術者が死ねばこの術も消えるはずだ！くらえ！神樹破壊剣、上級

！」

【融合・魔樹粉碎刀断】

涼喜が双剣を投げ融合・神授破壊剣の何倍もの速さで飛んでいく。
「無駄だ！そんな攻撃きかん」

無限がそんなことを言ってる間にも、涼喜は悠夜と無限との距離を縮める。

「これでダメだったら諦めるさ」

【虚無三爪痕】

無限の周りを赤、青、緑の残撃で大きく正三角形に切り裂いた。
そして、更に狭い間隔でさつきとは逆向きの三角形の軌道で斬った。

宙に正三角形とその中にもうひとつ正三角形が入った光が残った。

「ぐおおおお！」

「無限！」

「よし！効いた！」

無限が涼喜の技をくらって苦しみ、そして雷化した黒蘭も消えた。

「このやろ！」

【ナイトメアクリムゾン】

涼喜は無限だけに集中していて、悠夜の攻撃に気づかず、モロに
くらい、吹き飛ばされた。

「っう……」

涼喜は森の結界まで吹き飛ばされた。

「結界が貼られているが、ここからなら逃げ出せるか」

涼喜が左手で傷を抑えながら、結界に触れた。

その間にも、悠夜と無限が涼喜に向かって、走ってきた。

「考えてるヒマはなさそうだな」

【結界・衝撃破壊】

涼喜はいとも簡単に結界を破壊し、森の外へ出た。

「杉並、大志、それとクラハ、お前達もなんとか逃げ出してくれ」

涼喜はそう呟き、帝都の森を後にした。

外伝.. 3人の戦い（後書き）

作者「なんか長くなってしまいましたけど、中立者3人の戦いです！」

クラハ「由那以外の二人、中途半端に終わってなくね？」

作者「ん？まあ、そのあとは想像にまかせます！書いてたら長いんで・・・」

クラハ「いい加減だな」

作者「何がいい加減だ！由那を悠夜と永遠と負けずに戦わすの大変だったんだから！」

クラハ「じゃあそんな組み合わせするなよ！負けたら物語進まないんだったら」

作者「いいじゃんなんとかあったんだし！」

朝倉「人のオリキャラ使う時は、もうちょっとそのキャラを熟知してからの方がいいぞ」

作者「気にしない気にしない！さあ、次回はまた主人公をクラハに戻して未来編パート2」

クラハ「どこからスタートなんだ？」

作者「あの時間帯から」

クラハ「わからん！」

作者「まあ飛ばしたのがラハールだからね！50年後の何処に飛んでいったのかはお楽しみ」

クラハ「またしても悪寒が・・・」

作者「そうキニスナ！では次回もお楽しみに」

未来編：帰ってきた純一

「それでここはどこなんだ？」

クラハの中の鈍一が呆れながら言った。

「どこって、お前が行きたがっていた50年後だろ」

クラハの中のラハールが言った。

純一はもう一度周りを見渡したが、知っている景色ではなかったか。

あの時は桜が満開だったのに、今では緑が生い茂っていた。

「聞くが、ここは初音島なんだろうな？」

「はぁ？どこだそこは？！そんな場所知らんぞ」

ラハールのその言葉で、鈍一は全てわかった気がした。

「とりあえず、初音島に戻ろう」

謎の場所から飛び続けること20時間

「やっと着いた……」

50年後の初音島は純一が知っている、未だ桜が咲き続けている初音島だった。

一時はどうなることかと思っただが、空を飛べるとは便利なものだ。

「さて、まずは俺に会うか」

クラハの中の純一が言った。

「お前頭大丈夫なのか？自分に会えるはずないだろ！馬鹿馬鹿しい」
クラハの中のラハールがそう言い、寝てしまった。

これで、クラハの行動主導権は鈍一のものになった。

ピンポーン

クラハは朝倉家のベルを鳴らした。

数秒後、純一ではなく見知った少女が出てきた。真夜だ。

「なんじゃおぬし？」

真夜がいるってことは、美季との戦いはもう終わってしまったのか。

「おい、おぬし！誰じゃと聞いておるじゃろ！」

クラハが考えてる最中、真夜に竹刀で叩かれた。

「いってえ〜」

「痛いだろ、貴様！」

今のでラハールが目覚め、クラハは真夜を掴み上げた。

「わらわがせっかく出てやったのに、おぬしがクマみたいにポケ〜としておるからじゃ」

「なんだと！」

事態は最悪の方に進もうとしている時に、やっと純一が家からでてきた。

言うまでもないが家から出てきた純一は、この時代の年老いた純一の方だ。

「おやおや、なにやら騒がしいと思ったらもう来たのかい」

純一はそう言いながら、何事もなかったかのように、真夜とクラハを引き離した。

「ジジイは引っ込んでろ！」

クラハの中のラハールが言った。

「引っ込んでおるよ。じゃあこれを持って、この子とさくらの所まで行って来ておくれ」

純一はそう言い、クラハにでっかい袋を渡した。

中身は帝国の剣と鎧が入っていた。

「なぜ、こやつと・・・」

真夜がクラハに指をさし、そう言いかけたが純一はそのまま家に

入ってしまった。

「興が削がれた。俺様は眠いから起こすなよ！」

ラハールは鈍一にそう言い、再び眠りについた。

「この鎧ってベヒーモスの戦いで確かペしゃんこになったはずだけど、元に戻せたのか？」

「はあ？何をいっておる？ペしゃんこになった鎧を戻せるわけなからう」

「ん？何か話が繋がらないんだけど・・・」

そこから、風見学園まで真夜とは一言も話さなかった。

「さくらは多分学園長室だろ」

靴箱でクラハの中の鈍一はそう言い、学園長室に行き、ドアをノックした。

だが返事は返ってこなかった

「なんじゃ？おらんのか？」

「そうみたいだな」

クラハ達のが学園長室の前で立ち止まっていると、女の子に声をかけられた。

「あなたたち、学園長先生に用事？」

その子は音姫と同じクラスのまゆきだった。

鈍一は初めてこの世界に來た時会ったことがあったから、知っていた。

「そうですけど、どこにいるかご存知ですか？」

「多分保健室にいると思うけど・・・連れて行ってあげるよ」

そう言われ、保健室まで案内された。

「ここがそうよ！失礼します！ちよつといいですか？」

まゆきはそう言い、保健室に入り、またすぐに戻ってきた。

「いいみたいよ。あ、もうそろそろ放課後ね・・・」

まゆきはそう言い、付属校の方へ走って行った。

「失礼しまゝす」

クラハがそう言いながら、恐る恐る入るといきなりさくらに抱きつかれた。

「うにゅ〜これが魔王と一つになったお兄ちゃんかぁ・・・ボク的には前のお兄ちゃんがよかったなあ」

さくらが頬をすりながら言った。

これでラハールが起きてたらまた最悪な事態になっていただろう。

「学園長先生、そんな遊んでるヒマはないですよ」

奥にいた緑髪の白衣を着た先生が言った。

「舞佳ちゃんわかってるよぉ〜」

さくらはそう言い、クラハから離れて机の上においてあったメモを渡された。

「至急、この前行った洞窟に行ってほしいの！あ、真夜ちゃんはこのにいてね」

メモには剣を渡せとか、渉に薬を飲ませろとか書いていた。

「薬って？」

「これね。一種の興奮剤みたいなものね」

そう言われ、舞佳先生からオレンジ色の液体を受けとった。

「できるだけ急いで！それじゃあお願いね」

さくらにそう言われ、背中を押された。

「至急って言ってた位だから急いだ方がいいな」

クラハはそう呟き、例の洞窟へと向かった。

それと同時にラハールが寝ていてくれてつくづくよかったと思った。

急いで洞窟に向かうと、鈍一とゴブリン30匹が奮闘していた。

ここでも鈍一はこの前杉並達と謎のうめき声の正体を暴きに行つたときの鈍一だ。

っということは今から美季を起動させるってことか・・・

「ああ〜確かこんなこともあったなあ〜」

つとしみじみしていると

「鈍一君！小恋ちゃんと涉くんが・・・！」

茜がそう言い、過去の鈍一が涉のほうへ走った。

「あ！このときに剣が降ってきたんだっけ？」

そう思い急いで袋から帝国の剣を取り出し、投げつけた。

「確か何かセリフも言ってたような・・・あ！『お前ならできる！自分を信じる』確かこんなセリフだったよな」

これで1つ目の仕事をやり終えて、鈍一とゴブリンの戦いを最後まで見とどけた。

「ん？何をやってるんだ？」

都合が悪い時にラハールが目覚めた。

「さくらの頼まれごと」

クラハの中の鈍一はそう呟き、義之と涉の人工呼吸シーンを眺めてた。

「あいつ変わった趣味だな！」

「し！声がでかい」

そう言い、自分の口を押さえた。

「さあ、義之らも行ったし2つ目の仕事をするか」

クラハはそう呟き、変わり果てた涉に近づいた。

「よく見たら、ひでえ有様だなこりゃ」

義之にボコボコにされた涉に一瞬手を合わせ、舞佳先生から貰った薬を涉に飲ませた。

「これで二つ目の仕事完了だけど、このせいであの時の涉が変になったってことか」

クラハはそう言いながらメモを広げた。

「先回りして、帝国の鎧を置いとくだと？！」

クラハは先回りって言葉に驚き、急いで義之の後を追った。

「剣と一緒に渡せばよかったんじゃないかねえのか？さくらの奴、回りくどいことしやがって」

ラハールがめんどくさそうに言った。

「それじゃあだめなんだよ。それにお前いつからさくらって呼ぶようになったんだ？」

「ん？俺様はさくらって奴がどんな奴か知らないからな」

あゝ確かあの時ラハールは寝てただっけ、と勝手に納得した鈍一だった。

「ってか先回りとか無理！」

クラハの中の鈍一が弱音を吐き出した。

先回りしようと思えば、義之達と絶対鉢合わせしてしまうからだ。
「だらしがないな！貸せ！」

クラハの中のラハールはそう言い、帝国の鎧を魔力の球体に包み込んだ。

「魔王球か？そんなことしたらここが……」

「心配するな！力は抑えている」

そう言って、帝国の鎧を遙か先に投げ飛ばした。

ビュン！

「おい！あんなの当たったら死ぬだろ！」

「壁に当たれば大丈夫だ」

クラハの中のラハールはそんなことを言ってたが、心配で急いで様子を見に行ったら、ベヒーモスの頭に激突していた。

「あゝそういえば、これに救われたんだっけ……」

クラハそう呟き、胸をなでおろした

「3つ目完了。最後の仕事は……あいつらがここから逃げ出すまで待機か」

ラハールが勝手にメモを広げてみていた。

「あいつと戦う前にちょっと休んどくか」

クラハの中の鈍一はそう呟き、目立たない所で横になり一休みした。

「あいつって誰だ？」

「ものすげえ強い奴」

クラハの中の鈍一がラハールに返答した。

「俺様よりもか？」

「多分な」

「許せん！」

「頼りにしてるぜ」

クラハはそう呟きしばらくの間、眠りに入った。

未来編：帰ってきた純一（後書き）

いやゝ忙しかったうえ、IDを忘れてしまって大変でした。つといいわけしてみましたけど、大変長くお休みしていてすみませんでした。読者がいるかわかりませんが、なるべく読者に迷惑をかけないように頑張ります！

V S 天枷美季

「……！！」

奥の部屋から美季の叫び声がし、クラハはその叫び声で目を覚ました。

「やっと目覚めたか！」

クラハは義之達が脱出したのを見計らって、美季の所へ向かった。

「なっ！！」

美季が大きな叫び声と共に、いろいろな魔物が召喚されていた。ゴブリン、ドラゴンまで幅広い魔物の種類が存在し、真夜と戦っていた。

「おぬしか！ ちょうどよい！ あの女の後ろに回り、これ以上魔物を呼び出さないようにしてきてくれぬか？」

真夜がドラゴンとベヒーモスを相手にしながら言った。

「わかった！ とりあえず魔物の増殖を止めないと話にならないからな」

クラハはそう言い、瞬時に美季の背後に回り、右肩を剣で切り落とした。

「……………」

魔物の増殖は止まったが、美季はその場に座り込み、左手で傷口を抑え、泣き出してしまった。

「」

「なんかすごい罪悪感感じるんだけど……」

クラハの中の純一が吹き、美季に近づいた瞬間、

プ
ス

背後から何かに刺された。

クラハは顔を下にやり、腹部を見ると、美季の右腕が飛び出ている。

た。

「クソ！はあはあ、遠隔操作したのか……」

クラハの中のラハールはそう言い、貫かれた美季の右腕を腹部から抜きとった。

「ミミミ♪」

しかもいつの間にか美季の右肩から右手まで再生されていた。

「大丈夫か？おぬしはそこで休んでおれ」

魔物を全滅させた真夜が戻ってきた。

確かにクラハの腹部から大量の血が流れており、今にも止血しなければ危険な状態だった。でも

「俺はあいつを倒すために来たんだ。休んでいられるか！」

クラハはそう言い、再び美季に切りかかった。

キイイイイン・・・パキン

「ぐわあーーーーー！！」

美季の右手が電動カッターらしいものになり変わり、それでクラハの剣を切断させ、クラハの正面から切裂いた。

「・・・・・・はあ・・・・・・はあ・・・・・・」

クラハは膝を折り、立つことができなかった。

「ミミミミミ♪」

美季は鼻歌を歌いながら、クラハにトドメを刺そうとした。

ドス！ドカーン

真夜が横から美季を吹き飛ばし、間一髪の所でクラハを助けた。

「無理するな！ここは任せておけ」

そう言われ、クラハはその場に横になり目を閉じた。

クラハの人格の中

「なんなんだあいつは？」

ラハールが言った。

「知るか！でも身体をいろんな物に変えたり、いろんな魔物と呼び出したりできるみたいだ」

鈍一がラハールに言った。

「そんなことは俺様も戦っている時にわかってる！それに再生能力もあるみたいだしな」

「それにあいつと戦ってたら調子が狂うんだよ」

「それは同感だ！！クソ！俺様がこんな姿じゃなければ、負けんだが……」

「俺が足手まといって言いたいのか？」

「当たり前だ！レベル48のお前と融合させられ、俺様のほうは損ばかりではないか！」

「俺も融合したくてしたんじゃないよ！」

鈍一とラハールはずっと睨みあっていた。

グラグラグラ

「なんだ？」

「目を覚ます必要があるな」

ラハールがそう言い、クラハは目を覚ました。

「ここって研究所だったよな？」

クラハの中の鈍一が言った。

「多分あいつの世界だな」

クラハは雲の上におり、辺り一面綺麗な青空が広がっていた。

「ミーーー！」

美季がクラハの真下の雲の中から出てきた。

「お前何をしたんだ？真夜はどうした！？」

クラハが美季に言った。

「ミ〜？」

でも美季は首を傾げるだけだった。

「力を操れていないのか？それとも暴走なのか？どっちにしろここから出る必要があるな」

クラハの中のラハールがそう言い、右手に魔力を貯めた。

「何をする気だ？」

「ちよつとの間、右手を使わず、あいつの攻撃を耐えてろ」

ラハールはそう言い、黙ってしまった。

「ミーーーーー！」

美季は素手でクラハに突撃してきた。

「とりあえず逃げるか・・・ぐっ・・・」

クラハは逃げようと立ち上がったが、腹部の傷が深すぎて、またしゃがみ込んでしまった。

ドシーーン！メキメキメキ・・・パァン

ただタツクルされただけなのに、すごい音を発してクラハは吹き飛び、左肩の骨が粉碎した。

「うわーーーーー！」

クラハは右手で左肩を抑えようとしたが、右手が動かなかった。どうやら、右手の主導権だけはラハールにとられてるらしい。

「ミミ〜♪」

「今度食らったら確実に死ぬ・・・」

鈍一は死を悟った。

「待たせたな」

クラハの中のラハールが言い、右手を美季に向けた。

「この距離でこれを食らえば、おまえも即死だ！」

【至近距離発射・魔王球】

その距離、クラハの右手と美季の顔が30センチ。

魔王球を放った瞬間大規模な爆発を起こし、気づけば研究所に戻っていた。

「おぬし！大丈夫だったか？」

真夜が駆け寄ってきた。

「なんとか・・・それで美季のほうは？」

クラハが聞くと、真夜は煙を発してる方に指を指した。

「もう立ち上がるなよ・・・」

鈍一はそう願ったが、その願いは届かなかった。

煙があがると、その場に俯きながら美季は立っていた。

「もう魔王球は使えんぞ！どうする？」

クラハの中のラハールが言った。

「どうするも、後は真夜さんにがんばってもらうしか・・・」

鈍一がそう言っていると、美季が初めて喋りだした。

「チマチマと悪あがきしやがって・・・さっさとくたばれよ！！！」

美季から想像もできない言葉を耳にし、クラハはうろたえた。

天枷美季 人造人間

第2段階

HP	***	MP	***
攻撃力	6300	防御力	5200
魔力	7800	魔防	7300
精神力	***	敏捷性	2900

「なっ・・・ステータスに変更がかかった！2段階って一体・・・」

クラハがステータスチェッカーを眺めていると、顔面に衝撃的な痛みを感じ吹き飛ばされた

「グハッ！」

「ツペ！空気砲か・・・あれだけの威力とは・・・」

一緒に吹き飛ばされた真夜が、血を吐き捨てて言った。

「キャハハハ、中途半端に強いってのも嫌ね！楽に死ねないないも
んね！キャハハハハ」

美季が高笑いしながら言った。

「1段階の美季が可愛く見えるぜ」

鈍一はそう呟き、フラフラになりながら立ち上がった。もう痛みも感じないらしい。

「でもこれでトドメを刺してあげるわ」

【マジックブラスタ―】

おぞましい青い魔力の球体がクラハの前に表れ、そして爆発した。
「キャハハハハハ！さうて、世界破滅のカウントダウンと行きましようか」

美季がそう言い、後ろを振り返った瞬間

【ブレイクダガー】

どこからナイフが飛んできた。

「大丈夫か？お前の役目はもう済んだ！元の世界に戻れ」

美季の魔法で死んだと思ったら、涼喜がその魔法をかき消してくれている。

「これはちよつと骨が折れそうですね」

「朝霧君がいるから大丈夫だよ」

「あと朝倉君もね」

「俺はついでかよ！」

そこにはことり、みつくん、ともちゃん、涼喜、そして元の姿に戻っている鈍一がいた

クラハはすぐにわかった。

この5人は自分よりも未来から来た奴だと

「後は任しているのか？」

クラハが未来の鈍一に聞いた。

「ああ、また元の世界に戻って、強くなって来い」

「すまん」

クラハはその言葉を聞いて、美季を睨みつけ、次こそは勝つと誓い、元の世界に戻った。

「まずは回復が先決だな」

帝都の目の前にワープしたクラハが言った。

「もうすぐだ。もうすぐで……」

クラハが安心した瞬間

ボーーン

「帝国華撃団参上！」

9体のロボットが現れた。

「帝国って……おい！俺は帝国の……」

クラハがそう叫ぶが

「あなたから魔の魔力を感じます！魔界の者をいれるわけにはいきません」

ピンクのロボットがそう言い、切りかかってきた。

「重症で、しかも剣も折れてるのにどうやって戦えっていうんだよ！」

V S 天枷美季（後書き）

作者「再び元の世界に戻ってきたクラハ！」

クラハ「美季っていつ倒せるんだ？」

作者「いつか」

クラハ「それに俺帝国の奴等に狙われてるし」

作者「そういう運命なんだよ。さて帝国華撃団の紹介ですがカットします」

クラハ「なんでだよ！」

作者「だって9人も紹介するのめんどいし、実際セリフとか言うのは5人ぐらいだもん」

クラハ「ただの人数稼ぎってことか」

作者「そそ！ただの捨て駒w（前回の真紅同様）」

クラハ「前作唯一セリフがなく死んだやつか」

作者「うん！じゃあ次回もお楽しみに」

クラハ「予告は？」

作者「次回いよいよ、人気大のこみレンジャー登場！・・・以上！」

クラハ「人気大なのか？」

現代編：VSこみレンジャー

【破邪剣征・桜花霧翔】

ピンクのロボットから一直線に、クラハに向かって剣の波動が飛んできた。

そのほかの8体のロボットからも、バンバンと必殺技が飛んできた。

「待て！って生身の人間相手にロボットかよ！」

クラハは辛うじて全ての技を避け、必死に訴えた。

「ロボットではありません！神武です」

「ロボットには変わりないだろ！」

朝倉の必死の訴えも虚しく、美季との戦いで古傷が痛み出して、膝を折った。

「クソ！俺様はこんな所で死ぬのはごめんだぞ！お前、魔法剣士の癖に代わりの剣を出せんのか？」

クラハの中のラハールが叫んだ。

「無茶言うなよ！俺にそんなことが・・・」

朝倉がそう言いかけて、右手を見たら微かに光を発していた。

「まさか・・・」

カン！

クラハの手には白い光を帯びた剣が握られていて、紫の神武の薙刀と交わった。

「武器は出せたけど、血を流しすぎてあまり動けないぞ！」

朝倉が他の神武たちの攻撃を白い剣で弾き返しながら、ラハールに言った。

「俺様に考えがある」

【真空飛残撃】

って俺の技かい！！！！

ラハールが朝倉の技をパクって、神武達に放った・・・が

MPが足りなかった

「おい！！！」

朝倉がラハールに突っ込んだ。

「そういえば、あの魔王球でMP使いはたしたんだったな」

その瞬間、白の神武の必殺技がとんできた。

【狼虎滅却・天地一矢】

「もうだめだ・・・」

朝倉はそう思い、目を閉じた。

ズデューン

ものすごい音はしたが、その攻撃はクラハには飛んでこなかった。

クラハが恐る恐る、目を開けると、赤髪のポニーテールの女の子が釘バットで、白い神武の攻撃を受け止めていた。

「瑞希ちゃんそのまま絶えててや」

オレンジの髪的眼鏡っ子がそう言い、どでかいハリセンで神武を吹き飛ばした。

「何だあの2人は？」

華撃団たちは思わぬ敵が現れて、うろたえている。

高瀬 瑞希 こみパピンク

レベル6109

HP	3200	MP	6700
----	------	----	------

攻撃力	5440	防御力	4900
-----	------	-----	------

魔力	3500	魔防	4400
----	------	----	------

精神力	5560	敏捷性	1500
-----	------	-----	------

猪名川 由宇 こみパイエロー

レベル6126

HP	5600	MP	1200
攻撃力	***	防御力	3800
魔力	2000	魔防	2400
精神力	7900	敏捷性	2000

「魔界の奴らって最低ね！一人の男の子相手に9人で戦うなんて」
「それに、そんな機械で戦いよって、ウチが根性叩き直したる」

2人は帝国華撃団を魔界の奴らと勘違いしているようだ。

「待て！俺たちは帝国・・・」

「問答無用や」

そう言い、由宇と瑞希は恐れず9体の神武に突撃した。

「っち、魔界の奴は罪のない人間をも脅し、戦いに狩りだすとは卑怯な奴だ！皆、一旦退くぞ」

そう言い、勘違いして帝都に帰っていった。

「逃げるんか？魔界の奴らはチキンばっかか？」

由宇はそう叫びながら、奴らを追いかけた。

「大丈夫？」

瑞希に手を差し出してもらい、手を借りて立つことが出来たものの、一人で歩くのは無理な状態だった。

「血を流しすぎた」

クラハはそう言い、瑞希の肩を借り、何処か休める所に移動した。

「おゝい瑞希！」

前方から一樹とすばると詠美が走ってきた。

この3人は前会ったことあるから知っている。

「っで、この子はどちら様ですの？」

すばるがクラハに指を指して言った。

「魔界の奴等にやられそうな所を私達が助けたの」

瑞希が言った。

クラハはこの時、本当のことを言おうか言わないか迷っていた。
自分が魔界の者ということを・・・

それからクラハ達は大きな木の下で由宇の帰りを待つこと3時間。
「遅せえなあいつ」

「どうせパンダのことだから、どこか道草でもくってるのよ」

一樹と詠美が由宇の噂をしていると、ちょうど由宇が走って帰ってきた。

「ってかなんであいつあんなに慌ててるんだ？」

一樹が由宇の慌てっぷりに疑問を抱いた。

「あの様子、俺様らのことがバレたな」

クラハの中のラハールが呟き、一樹達から離れた。

「由宇！そんな慌ててどうしたんだよ？」

一樹が由宇に駆け寄って言った。

「あいつら・・・はあはあ、魔界の奴らとちゃう。はあはあ、あいつがそうや！はあはあ・・・」

由宇は息を切らせながら、クラハに指を指して言った。

「ばぎゅう！あなた悪者さんでしたのね！私達を騙すなんて許しません」

すばるはそう言い、クラハに向かって構えた。

「すばる！由宇！みんな！俺だって！」

「お前らが勝手に勘違いしたんだろ！」

純一の声はラハールにかき消され、純一の技を真似をして、白い剣を召喚して構えた。

「お前らには一撃で死んでもらう！！」

「ちょ、なんでお前は話し合おうともせずに・・・」

純一が突っ込むがラハールには聞く耳をもたなかった。

【真空飛残撃】

ラハールはまた純一の技をパクリ、砂埃が立ち上がり、大きい木ごとすばるたちを切り裂いた。

「ガキが！ヒーローごっこは家の中だけにしろってんだ」

ラハールがそう呟き、剣を戻した瞬間。

「油断禁物ですよ!」

すばるがクラハの背後に現れた。

「なっ・・・!!」

クラハは急いで剣を召喚し、すばるに突き出したが、かわされてしまった。

「今度はこっちの番ですよ!」

【流牙旋風投げ】

「ぐわーーー」

クラハはすごい勢いで投げられ、地面に叩きつけられた。

「クソ! 貴様らは一体・・・」

クラハがそう言い、立ち上がると

「世界を脅かす悪を阻止するための集団!」 ↑すばる

「唯一男一人こみパブルー!」 ↑一樹

「戦う女将こみパイエロー!」 ↑由宇

「自然にやさしいこみパグリーン」 ↑詠美

「お色気担当こみパピンク」 ↑瑞希

「燃える闘魂こみパレッド」 ↑すばる

「5人そろって『こみレンジャー』」 「ですよ!」

5人はポーズを決めてクラハの前に立った。

「こみレンジャー? 笑わせるな! そんな奴等に俺様が・・・」

クラハの中のラハールがそう言いかけた瞬間、釘バットが目に入
った。

「早い・・・!!」

クラハはこみパピンクの攻撃を顔面にくらい、吹き飛んだ。

「悪く思うなよ」

いつの間にかクラハの目の前にこみパブルーが待ち伏せており、
蹴り上げられ上空に飛ばされた。

「調子に乗りやがって!」

クラハの中のラハールは剣を召喚し、こみパブルーに技を放とう

と思ったが

「ウチらを敵にまわしたことを後悔するんやな」

上空ではこみパイエローがハリセンを構えていて、クラハを思いっきり叩き落した。

ズドン！

クラハは思いっきり地面に叩きつけられて、地面には大きなクレターが出来ていた。

「なんなんだこいつらは・・・」

クラハがそう呟き、起き上がろうとした瞬間、

「早くそこをどかないと詠美ちゃんさまの餌食になっちゃうよ～～」

声のするほうを見ると、先端がとがった大きな木がクラハに向かって飛んできた。

「マジで殺す気かよ・・・」

クラハはバックステップでこみパグリーンの攻撃を避けたが、また背後にこみパレッドが待ち構えていた。

「クソー～～～」

ラハールはかた足を軸にして回り、白い剣ですばるを横になぎ払った。

「これ以上の悪あがきはお見苦しいですよ！」

すばるは剣を素手で受け、クラハに足払いをかけた。

「しまった・・・！！」

「これでおわりですよ！！」

【大影流裏奥義・蓮華双龍拳】

すばるは両手を前に突き出し、クラハに当てた瞬間、ものすごい衝撃が起き、クラハを地面に叩きつけ、そこから30メートル以上吹き飛んだ。

クラハは死亡した

「ぱぎゅー!! 最後は必ず正義が勝つですよ!!」

現代編：VSこみレンジャー（後書き）

クラハ「つてか俺死んだぞ！」

作者「あそこまで弱ってたらしょうがない」

クラハ「主人公が死んで、物語は続くのか？」

作者「続かないんだったら、わざわざ殺さないよ！君には死んでもらう必要があった！！」

クラハ「そんな力強く言われても・・・」

作者「それじゃあ次回もお楽しみに」

クラハ「予告は？」

作者「次回はある人のオリキャラが登場！」

クラハ「それだけかw」

天界編：脱獄

俺は死んじまったのか？

確かあのゲームの世界では、俺が死なないかぎり、他の奴は生き返れるってさくらに聞いたが

実際はどうなんだ？ 周囲は暗闇でクラハ一人、力なく浮いていた
「死んでもお前と別れられないのが、災難だな」
朝倉は愚痴をこぼした。

「それはこっちのセリフだ。俺様の未来を奪いやがって」
ラハールはいつもの威勢は消え、棒読み状態で言った。
「もしかして俺たちはこのままか？」

「俺様を知るわけ無いだろ」
ラハールのその言葉でその場は静寂しきった。

何時間こうしてるんだ？ 時間の感覚がなくなってきた。

「うおおー！ー！ー」
しかも何か叫び声・・・いや、うめき声まで聞こえてきたし、俺も終わりだな・・・

朝倉がそう思っていると、光がこちらに向かってきて、朝倉はまぶしくて、手の甲で目を押さえた。

「うおおー！ー！ー」

「ここから出せ！ 出せ！」

クラハが目を開けると、そこは陰気くさい、石でできた牢獄に閉じ込められていた。

他の牢獄には衰弱しきってグッタリしてる人もいれば、凶暴そう
で今にも牢をぶち壊しそうな奴もいた。

「ここはどこだ？ 地獄か？」

朝倉が呟いた。

「いや、地獄にしてはおかしい！地獄にはこんな所ない」
ラハールが言い切った。

「それじゃあここは・・・」

クラハは手をあごに添えて、考えた。

「ここは一応天国だぜ」

クラハの後ろの壁にグツタリとしている男の子が言った。

クラハの牢獄には弱りきった男の子と、この場所でも自由気ままに生きてそうな少年の2人がいた。

弱りきった少年の特徴は、黒い瞳に短い黒い髪と地味な顔立ちで上の服はボロボロで上半身裸状態だった。

ズボンは薄くなっているボロボロのジーンズをはいていた。

もう一人の少年の特徴は、クラハと同じここに来たばかりなのか、まだ服装は綺麗だった。

肩くらいまでの青紫の髪で、臙脂色のジャケットに上から白いコートを羽織っていて、黒のズボンをはいていた。

「天国ってありえないだろ？なんで牢獄なんかあるんだよ？」

クラハは弱りきった男の子に言った。

「ここは『償いの牢獄』天国にも地獄にも行けない人がここにいられるんだよ」

「天国と地獄にも行けないってどういうことなんだよ！」

「お前、人間と魔族の融合体だろ？」

同じ牢獄の怠けきった少年が言った。

「なんでそれを・・・」

クラハは想定外なことを言われ、一瞬固まった。

「魔族は問答無用で冥界って所に送られるが、人間はその冥界には行けないんだ。」

だから、人間と魔族が融合してるお前を裁ききれないからここに来たってことだ」

その少年はそう言い、そっぽを向いた。

「お前は どうしてここに いるんだ？ 見た所 人間っぽいけど・・・お前も」

クラハが2人の少年に言った。

「俺は死んでは いない。ただ『永遠の秘宝』を手に 入れたこと でここに いれられた」

青紫の髪 の少年は そう言い またそっぽを 向いた。

「俺はある女に濡れ衣を着せられてここに いる。しかも 助けに来る 気配なし」

弱りきった男は そう言い、天井を見上げ、何かを 思いつめて いた。
「それじゃあ 脱走すれば いいじゃないか？」

クラハは そう言って、牢に 近づいた。

「そう簡単 に脱走 できたら 苦労は・・・」

「開いたぞ」

クラハは 白い剣を 召喚して、牢を 切り落とした。

「お前結構 やるじゃないか！ こういう 奴が来るのを 待って たんだ！俺は ナタス。ここを 出るまで よろしく頼むぜ」

そう 言って 先に 出口の方へ 歩いて いった。

「お前は どうするんだ？」

クラハは 弱りきった 少年に 言った。

「俺も 行くよ！でも 足手まといになる かもしれないけど・・・」

「そんなの 気にする なって！俺は クラハ！仲間 は多い方 がいい からな」

クラハは そう 言って、座り込んでる 少年に 手を 差し出した。

「ありがとう。俺の名は 阿達 桜花。君みたい に魔法は 使えないけど よろしく頼むよ」

そう 言って2人は ナタスの 後を追った。

残りの 牢獄に 閉じ込められてる 奴らを ほっと いて・・・

「ってか ここから 脱走すること で生き返れるのか？」

クラハが 桜花に 言った。

「生き返ることはできないけど、天国で暮らせるようになるよ」

「それじゃあ困るんだよ！なんとかできないのか！？」

クラハは桜花に無理な質問をした。

「あまり薦めたくないけど、神を殺して命をもらうしかないけど・・・それじゃあ礼美が凶に乗るし・・・」

最後の言葉が聞き取りづらかったが、クラハはそれしかないと思った。

そうしてうちに、ナタスに追いついた。

「ここからが問題だな」

ナタスは曲がり角の壁に背をつけて、追いついてきたクラハたちに言った。

クラハ達も曲がり角の先を見ると、羽が生えていて、槍を持った兵士と思われる者がうじゃうじゃいた。

「天兵だな。突っ込むのはいいが、一人でも逃がしたら、援軍を呼ばれて全滅だ。特にお前は」

ナタスはそういい、クラハに指を刺した。

「どういうことだ？」

「俺と桜花はまだ死んでないから大丈夫だが、お前は死んでここに来た。ここでまた死ねば」

あの世にも、この世にもお前は存在しない者になる」

ナタスは真剣な顔で、クラハの目をまっすぐ見て言った。

「俺はもう死なん」

クラハの中のラハールが口走った。

「それじゃあ期待してるぜ！」

ナタスはそう言い、天兵の集団に突っ込んだ。

「桜花！行くぞ！」

クラハもそう言い、ナタスの後に続いた

「いや、俺は戦えないんですけど・・・」

天界編：脱獄（後書き）

さて、今回出てきた新キャラは桜花とナタス。

桜花はRYOさんのオリキャラで原作は自分のPCの中ぐらいたと
wナタスは臙条 司さんのオリキャラで詳しくは「Moon at

Tomb」を読んでみてください。数倍楽しめます。http://

ncode.syosetu.com/n9840a/

クラハ解散

「おらああ！」

ナタスが身の丈ほどもある長い銀の刀を召喚し、近く为天兵に切りかかった。

「だ、脱走者だ……」

天兵が一斉にそう言い、出口付近に構えていた天兵が上層部に伝令に行こうと扉を開けた。

「行かすか！魔王球！！」

「ぐわーーーーー」

クラハから出口までの直線状にいた天兵をまとめて魔王球で倒した。

「あれ？もう終わりか？」

クラハが周囲を見渡すと、何人か天兵が倒れてるだけで、意識がある奴はいなかった。

「あんな技出せるとはすごいな！今度も頼むぜ！！」

ナタスに期待され、次のフロアに進むことにした。

「ってかもう使えないぞ、魔王球……」

クラハの中の純一が呟いた。

それからクラハ達は、天兵を見つけは、上層部に連絡させる間も与えずに倒し、簡単に牢獄から脱走できた。

「これも簡単に脱走できるとは、神も怠け者だな」

クラハが牢獄から出て、外の空気を思いっきり吸い込んで言った。

「にゃ」

「なんだこの猫？しっし」

クラハは近くに寄ってきた白猫と黒猫の2匹の猫を追い払おうとした。

「セレスとディアナじゃないか！」

ナタスは2匹の猫に手を差し伸べて言った。

「なんだ、お前の飼った猫だったのかよ・・・」

クラハはそう言い、その猫の頭をなでた。

「にゃ」

「おい、セレス！ディアナ！お前たち言葉はどうした？なんで本物の猫みたいなのに『にゃー』しか言わないんだよ」

ナタスが2匹の猫に言った。

「その猫喋るのか？」

クラハは目を輝かせながら言った。

「ああ、でも今は何故か喋れないみたいだ。一体何が・・・」

ナタスは白猫と黒猫を両肩に乗せた。

「俺の家に行けばもしかするとわかるかも」

桜花がそう言った。

「お前の家に何かあるのか？」

クラハが聞く。

「何かあるって言うか、今まで牢獄にいたから、外の情報とわからなかったし、家に戻って情報収集をした方がいいかなと思って」

「それもそうだな」

桜花の言い分に、ナタスが納得した。

こうして3人は桜花の家に向かうことになった。

「お前の家ってなんで天国にあるんだ？」

「ちよつといろいろあってね・・・」

桜花の家

「ただいま」

桜花がそう言って、家のドアを開けた。

そのまま進んでいくと、台所に突き当たり、隣はリビングだった。そのリビングに2人の女の子がいた。

一人は赤茶色の髪の毛をまっすぐに腰のあたりまで伸ばしていて、右耳だけイヤリングしている女の子。

もう一人は黄色い髪でさっきの女の子と同じように腰まで伸ばしており、赤いウサ耳バンドをしていて赤いレオタードに、背中には小さい羽が生えていた。

「あ、桜花！今までどこ行ってたのよ！あんたが1ヶ月連絡も無いし、帰ってこないから新しいお手伝いさんを雇っちゃったわよ！」

赤茶色の女の子が、黄色い髪の子を指を指して言った。

その女の子は正座をして洗濯物をたたんでいた。

「どこ行ってたって、礼美が俺を神の社に突き落としたからだろ！」

「突き落としたって人聞き悪いわね！偵察に行かせたの！それにどうしてそれだけでそんな場所に入れられてるのよ！！」

「礼美がふだんからサボりまくってるから、神に『償いの牢獄』に入れられるんだよ」

「うるさいわよ！奴隷1号のくせに！そんなの脱走すればいいだけでしょ！何あんな所から脱走するだけで1ヶ月もかかってるのよ」

桜花と礼美という女の子の言い合いは、この後5分続き、泣きを見たのは桜花だった。

「っでその後ろの2人は誰？」

礼美が部屋の隅っこでいじけている桜花に聞いた。

「この人たちは俺と一緒に牢獄から抜け出してきた人たちで、こっちがクラハでそっちがナタス」

桜花は背を向けたままそう言った。

「よろしく」

クラハとナタスはそう言い、礼美に軽く頭を下げた。

「私は八神 礼美。っでそっちのお手伝いさんが・・・」

礼美がそう言いかけた瞬間、クラハの中のラホールが叫んだ。

「フロン！お前なんでここにいるんだよ！」

「え？え？どちら様ですか？」

その子は怯えながら、クラハを見た。

「俺様だ！今は人間と融合してしまっってこんな姿だが、お前なら元の俺様に戻せるはずだ！」

ラハールがそう言うのと、

「ラハールさんですか！何で元に戻すんですか？そっちのほうがかっこいいですよ」

「かっこいいもクソもあるか！俺様は1秒でも早く元に戻りたいんだ！」

「わかりましたよ・・・」

フロンはそう言い、杖を取り出した。

「精霊さん、精霊さん、この者の姿を元に戻したまえ」

いかにも子供だましのような呪文をフロンは目を瞑りながら唱えた。

そしたら急にクラハの身体が光りだした。

純一は眩しくて目を閉じた。

そして、再び目を開けると、目の前にはラハール。自分の服装を見ると見慣れた帝国の鎧。

「よっしゃー戻ったぞ！」

ラハールは喜び叫んだ。その時、

ドンドンドン

誰かがドアを思いっきり何回も叩いた。

外を見ると数え切れないほどの天兵。

「脱走がバレたのか？」

ナタスがそう言った。

「違う、今まで人間と魔族で邪悪な魔力は薄らいでいたのが、二人の融合が解けたせいで、純粋な邪悪な魔力を感じとられたんだ」

桜花はそう説明した。

「俺様が悪いみたいだな。まあ元に戻ったことだし、魔界に帰るか・・・行くぞフロン」

ラハールはそう言い、フロンの腕をつかんだ。

「ちょっと待ちなさい」

礼美がラハールを呼び止めた。

「なんだよ」

「私達も連れて行きなさい」

「え？え？何言ってるんだよ礼美！魔界にいったってどうするつもりだよ」

さっきまでいじけていた桜花が、礼美の両肩に手を置いて言った。

「神を殺し、私が新しい神になるための準備よ」

めちやくちゃ言ってるよ、この女の子……という目で純一とナタスは見ていた。

「礼美！やめとけ！神なんか敵うはずないだろ！」

桜花は必死に礼美を説得した。その間にも天兵はドアを壊しにかかっている。

「あれがあれば倒せるわ。魔界の秘宝、『デスノート』あれば……」

礼美がそう言い桜花はため息をついた。

「そんな秘宝どうやって……」

桜花が言いかけた瞬間、ナタスが止めに入った。

「何を言っても無駄だろ？それはお前が一番わかっているはずだ。それよりドアをぶち壊される前にさっさと魔界に逃げようぜ」

ナタスが桜花にそう言って、桜花は黙ってしまった。

「げ！！」

急にラハールが叫んだ。

「どうしたんだよ？」

「俺様死んでるじゃねえか！これじゃあ魔界にワープするのは無理だぞ！」

そう言った瞬間ドアをぶち壊されてきて、天兵がなだれ込んできた。

「お前らしっかり捕まってる」

ナタスがそう言い、全員ナタスにしがみついた

「座標面……基準点……終着点……中心線……クソ！全部適当だ！指定座標平面……歪曲！」

ナタスがそう言った瞬間、純一達は身体が浮き上がるような変な感覚になり目を閉じた。

「もういいぞ！ってかここどこだ？」

ナタスがそう言い、純一は目を開けた。

辺りはさっきの場所とは変わり無く、前と違うと言えば民家がないだけだった。

「ここは始まりの地……」

桜花がそう呟いた。

「なんだそこは？」

ラハールが言った。

「ここから下界や魔界、地獄、冥界、に行く入り口みたいなものかな」

「じゃあここから歩いて……」

ラハールがそう言いかけた時、桜花が横から言った。

「死んでいるラハールと朝倉は下界と魔界には行けない」

「じゃあやることはひとつじゃねえか」

桜花の言葉にラハールは笑みを浮かべながら言った。

「神を殺し、天界を乗っ取ってやる！ハーツハツハツハ」

「そうね。やっぱインチキアイテムに頼るより、直接言ってズバツと殺しちゃおう」

何故か礼美まで乗り気でそう言った。

「そんなことしたら……」

「シャラップ！」

桜花は礼美を止めようとしたが、礼美の一言で桜花は黙ってしまった。

「神殺しか。まあ神ならこいつらが喋れない理由ぐらい知ってるだろ」

ナタスは両肩に乗っかってる2匹を見ながら言った。

「いざ！ 神の社へ！！」

そう言って5人は神の社へ歩き出した。

「いいのかなこんなこととして・・・」

桜花はそう呟き、5人の後を追った。

クラハ解散（後書き）

天界編の中盤に差し掛かり、生き返るために神の社へ！

純一「そんなことしてもいいのか？」

作者「お前も桜花と同じ口か？」

純一「だって神だぜ？」

作者「果たして純一達は全能なる神に敵うのか？」

純一「なんだそのいかにも誰か死にそうなセリフは？」

作者「次回もお楽しみに」

純一「無視かよ！あ、しかもいつの間にか↑の名前の部分クラハから純一に戻ってる」

外伝…その頃下界では・・・

「うゝんもう誰か帰ってこないかなあ」

さくらが窓から外を見ながら言った。

純一が帝都に出かけた後、昔の本拠に戻ってきたのは、眞子、萌、環、美咲、アイシアの5人だけだった。

「さくら、純一は？」

アイシアがさくらに言った。

「帝都だよ。ボク達もそろそろ行こうか！これ以上待っても誰も来ないかもしれない」

さくらはそう言って、みんなに出かける準備をするように言った。

帝都まで何匹かの魔物に襲われたが、さくら達の敵ではなく、難なく帝都に着いた。

「お兄ちゃん元気にしてるかなあゝ♪」

さくらは久しぶりに純一と会えることが嬉しいのか、ずっと鼻歌を歌いながら歩いていた。

お城の目の前まで来て、さくらは門番に右腕を上げただけで扉を開けてくれた。

「あ！あなたは陛下のお仲間の！！門を開けろゝゝゝ」

門番はそう言って、急いで門を開けた。

「うわゝいつきても大きいですね」

美咲は帝国の城の入り口だけを珍しそうに見ていた。

「美咲ちゃん、こんな所でビックリするのは早いよ」

王座の間

「うわゝ！うわゝ！うわゝ！」

美咲は帝王工藤が来るまでの間、そう言って辺りを見わたしていた。

「工藤陛下が参りました」

何処かの兵が入り口付近で、そう言う話を話してるのが聞こえた。
「ちょっと席をはずしといってもらえるかな？」

工藤は見張りの兵にそう言い、王座に座った。

王座の左右には由真將軍と真夜の変わりに光喜がいた。

「芳乃先生にみんな、来てくれたんだね。ありがとう」

工藤はそう言い、由真達に止められたにもかかわらず頭を下げた。
「ドントウォーリー、気にしないで！それでお兄ちゃんは？」

さくらがそういうと、工藤は口を閉ざした。

「まさかまだ来てないとか？だらしないわねえ」

眞子がその場の空気を暗くさせないように、明るく言った。

「まさか・・・」

環がそう言った瞬間、

「俺が全部悪いんだ」

「私が全部悪いの」

由真と光喜が一緒に言った。

「どういうこと？」

工藤は、朝倉が光喜と由真のせいで、どこかの世界に飛んでいったことを話した。

「なんで助けに行かないの！」

さくらが怒りたい気持ちを押さえながら言った。

「行きたくても行けないんだ。どこの世界に飛んでいったかもわからないのに・・・」

工藤は悔しそうに言った。

「助けようと努力はしたんですか？」

萌がいつもより強い口調で工藤に言った。

「今はこの帝都を守るのでいっぱいなんだ。だから俺たちは朝倉が無事に帰ってくることを祈るしか出来ないんだ!!」

工藤がそう言い、さくらはこの世界に來た目的を思い出した。

「うん！お兄ちゃんならきつと大丈夫。それより今この世界はどうなってるの？」

さくらはそう言い、工藤は反乱軍のこと魔界の奴らのこと、王国と帝国が壊滅寸前のことを話した。

「反乱軍と魔族か・・・今回は一筋縄じゃいきそうに無いね」

さくらがそう呟いたのと同時に、王座の間のドアが大きな音を立て開けられた。

「何事だ！」

工藤が王座から立ち上がって言った。王座の間に入ってきたのは一人の少年だった。

「このような参上はお許してください。俺は王国軍第2部隊隊長、鬼庭隼人。帝国に救援を求めたく参上いたしました」

その少年、隼人は深く頭を下げ、工藤に言った。

「救援ってことは、もう本城に反乱軍の手が回ってきたと言うのか？」

「はっ！」

隼人は姿勢を変えず、頭を下げたまま言った。

「工藤君、今ここで王国軍が滅亡したら、あとあと厄介だよ」

さくらが工藤に忠告した。

「うん。由真、5万の兵を連れて帝都に向かってくれ」

工藤が由真に命令した。

「私も行きます。王国には天枷さんがいます！それに私も元王国の将、行かせて下さい」

環が工藤に言った。

「湖ノ宮さん・・・」

工藤は少し考え。

「わかった。でも無理はしないで」

そう言って、由真と環は隼人と共に1万の兵を連れて帝都を出た。

この2時間前王国では……

「神崎！神崎龍之介！！」

「名前と呼ぶな！」

「じゃあゴダージュ！」

「なんだ？」

一人の少年が王座の間に入ってきた。

「竹原先輩！ちゃんと王様って言わないと失礼ですよ」

美春がその少年に言った。

「別にいいんだよ。ゴダージュも了承してるからな！」

竹原 龍太 王国右將軍

レベル7800

HP	***	MP	7700
攻撃力	7400	防御力	6200
魔力	4320	魔防	5300
精神力	6300	敏捷性	1900

「あゝ！これ以上王様を侮辱すると、美春は許しませんよ」

そう言って、美春は龍太に剣を向けた。

「わかったって！だからその剣をしまってください」

龍太は両手を上げていった。

「っでそんな慌ててどうしたんだよ？急用じゃなかったのか？」

ゴダージュの隣に立っていた黄色い髪のツンツン頭の男が言った。

風 宗一郎 凶祓い（まがばらい）一族

レベル	8300		
HP	***	MP	4300
攻撃力	999	防御力	8100
魔力	4000	魔防	4700
精神力	7800	敏捷性	1900

「そうだった！反乱軍がすぐそこまで来ている！」

「なんだと」

ゴダージュはそう言い、信じられず自分の目で確かめるべく外に出た。

「兵の数はおよそ30万。こちらも30万。戦況は五分五分といった所だ」

龍太がゴダージュに言った。

「おもしろそうじゃねえか！つで兵を指揮してるのは黒蘭使いか？」

宗一郎がウキウキしながら龍太に言った。

「それは今、隼人が偵察に行っている」

「では、王国最強のこみレンジャーは帰ってきたか？」

「それも、この前の戦いから行方知れずだ」

龍太がそう言った瞬間、隼人が戻ってきた。

「反乱軍の兵を指揮しているのは無限です！他の将も確認できましたが、悠夜の姿だけは見当たりませんでした」

隼人がそうゴダージュに報告した。

「反乱軍リーダーが、軍を誰かに任せるとは思えん・・・」

ゴダージュはそう呟きながら、少し考えた後、

「隼人は帝国に救援を！宗一郎と美春は各10万の兵で反乱軍を迎え撃て！龍太は城の警備を！」

ゴダージュは將軍たちに命令を下し、王座の間に戻った。

外伝：その頃下界では・・・（後書き）

えゝずっと下界の状況をおろそかになっていましたから

この回と次回は下界の状況をお送りします！

しかもこの戦いの結末は7話で杉並がポロッと言っちゃってますw

では新キャラの紹介！

えゝまずはDCキャラは説明する必要ないかな？

環は前作、美春と一緒に王国軍に仕官してました！他の眞子、萌、アイシア、美咲は無所属でどちらかというと帝国派でした。

鬼庭隼人はオリキャラです！自作『魔女狩り』の主人公でもあります

ゴダージュ（神崎龍之介）と竹原 龍太は須賀 隆太郎さんのオリ

キャラです。「空のかなたへ：BROKEN WING」というブ

ログもやっていますので、裏方を知りたい人はどうぞ<http://blogri.jp/captainw6294a/>

／blogri.jp/captainw6294a/

凧宗一郎は天上天下に出てくる人物です！前作も王国軍の将として登場します。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8415c/>

D.C.Q.S.II～ダカーポクエスト2～

2010年10月9日01時46分発行